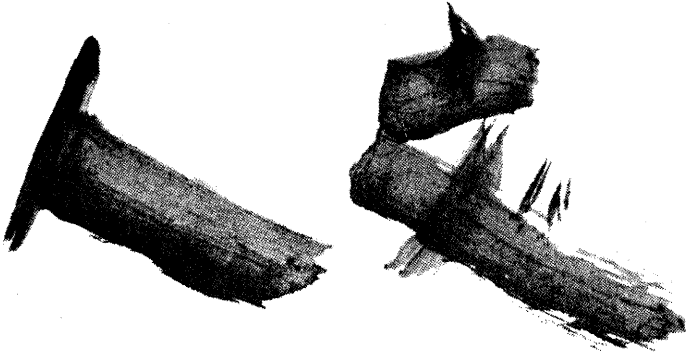
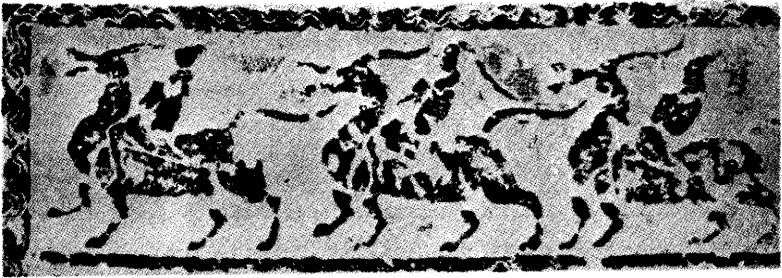


Title	人文 第45号
Author(s)	
Citation	人文 (1999), 45: 1-57
Issue Date	1999-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/57171
Right	
Type	Article
Textversion	publisher



第四五号



1999

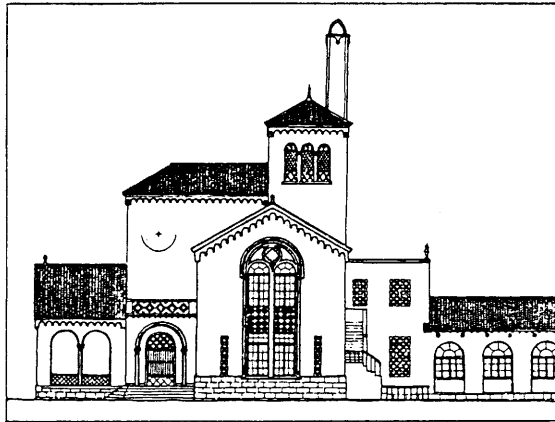
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第四五号

1998年1月—1998年12月

も く じ



随想

私的な私的な話

バーチャル・ネイバーフッド

日本・沖縄・朝鮮

オイシイデス

吉川 忠夫

勝村 哲也

タカシ・フジタニ

ビエール・バイヤール

講演

退官記念講演

中江兆民の位置

夏期講座

古代メソポタミアの粘土板（前川）／古代中国の本簡

（畠谷）／『百万塔陀羅尼』の語るところ（勝村）／中国古

典籍のブックデザイン（木島）／日用百科の使われかた

（横山）／印刷文化と手稿（森本）

開所記念講演

ト辞の法表現（森賀）／軍事共同体の文化人類学（田中

雅）／戊辰戦争と徳川慶喜（佐々木）

彙報

おくりもの（24）訃報（24）人のうごき（24）海外での

研究活動（24）外国人研究員（28）招聘外国人学者（28）

外国人研究生（28）東洋学文献センター講習会（29）お

客さま（30）インターネット・ホームページ（31）

共同研究の話題

六祖慧能は実在する

（発見術）としての人文学へ

進化論を読む育種家たち

日本の植民地支配—朝鮮と台湾—

所のうち・そと

断章—ある問答から—

二度目の台湾訪問で感じたこと

カーラント・コレクションへの旅

中世学会議

延安の三月

雨うけと変な器

中江丑吉遺品を守ってくれた中国女性のこと

書いたもの一覧

飛鳥井雅道 12

田中 雅 20

木島 24

森本 24

佐々木 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

田中 雅 24

私的な私的な話

吉川 忠 夫

「白駒過隙」の言葉のとおり、人生はあっという間に過ぎて、致仕まで後わずかに一年をのこすのみ。この際に臨んで、極めて私的なことがらながら、東大部に所属する私が、北白川の分館を捨てて東一条の本館に住まうこととなったわけを、いささか弁じておきたい。よほどの物好き、と思われているかも知れないのだから。

私は分館の建物とはほんの目と鼻の先の同じ町内に生まれ育った。小学校の夏休みや冬休みに課される図画の宿題には、「わが塔はそこに立つ」というわけではないけれども、自宅の二階の窓から間近に望まれるその建物の白亜の塔をしばしば画材に選んだものである。塔の上にちよこんと乗る避雷針が少しかしいでいたことも、よく憶えている。いつかの落雷でかしいのだそう。そしてまた父も、東大文化研究所時代のその建物に研究室をもっていた。しかし、その建物の中に足を踏み入れたことは滅多にない。扉を通して垣間見られる赤いジュータンの続くしんとした廊下。それはいかにも厳めしいものに感ぜ

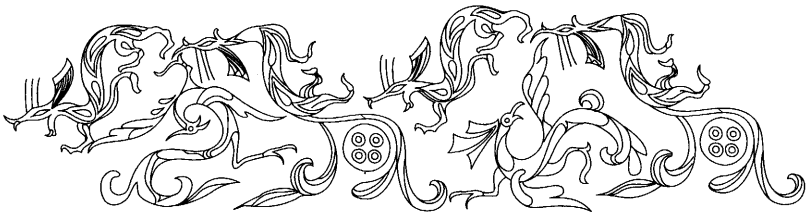


られた。母親から父への用事を言いつけられても、研究室の窓の下に立って、「お父さん」と声をかけるのがせいぜいだった。

それにもかかわらず、こんなこともあったことを思い出す。

やはり小学生時代のことなのだが、悪童連とその建物の中に闖入し、キャッチボールを始めたのである。今でいう哲文研究室の南側の前庭で。グラブに投げこまれるボールが、建物の壁に反響して快い音を立てるのを楽しもうとしたのに違いない。ところが突然窓が開き、「うるさあい、出て行け」とどえらい剣幕で一喝され、ほうほうの体で遁走したのだった。一喝を食らわされたのは、一体どなたであつたのだろう。このようにして、子供心にも、その建物に対するアンビヴァレントな感情が私には交錯していたのだ。

私が教養部から人文研に移つたのは、東一条の本館の建物が落成する一年前の一九七四年のこと。最初の一年間は北白川の建物に研究室をもらったのだが、少年時代の記憶が頭の中をぐるぐると駆けめぐって、どうにも落ち着かない。それに何よりも弱つたのは、顔見知りのおばさんから、「坊ちゃん、立派にならりましたな」と近くの路上で声をかけられることだった。私が本館に住まうことを決心したのは、こんなわけのあつたことを分かつていただきたい。



バーチャル・ネイバーフッド

勝村 哲也

制度を語るのに理念より説き起す議論を聞きながら、「博士驢を買う。書券三紙、未だ驢の字有らず」という諺が浮んだ。ヨーロッパ中世のセミナーオの教授ならどう言うかなどと想像しているうちに、突然、マルク・ブロックの言葉が気になった。部屋にもどり書架を捜すと、ある。「見る角度によって、封建時代のヨーロッパ文明が、時には驚くばかり普遍的に見えたり、時には極端に局地主義的に見えたりするとすれば、この矛盾の源はなによりも非常に一般的な影響の流れが遠くに及ぶことを助長し、同時に、近隣の諸関係の劃一化を細部では妨げていたコミュニケーションの体制に起源があった」（新村・森岡・大高・神沢訳『封建社会』第一巻）。

古代を人文学、中世を宗教学、近世を政治学、近代を経済学の時代とみれば、すでに遠く隔った中世なのに、あまりにも現代と似通っているではないか。その原因は、マルク・ブロックの指摘する中世のコミュニケーションの体制と、軌を同じくする体制が、現代に再び出現し始めているからではないかと、訳文中



の近隣という語を見つめながら考えた。『広辞苑』の第五版にはチャットという言葉が採録されている。元来は世間話とか床屋談義に類するが、ここにいうチャットは、インターネット上に開設されたホームページを通じて、一面識もない他人同志がおしゃべりを楽しむことである。そして、日頃顔見知りの人達との会話はできないが、チャットならいくらでも続けられるという人達によって、インターネットがコミュニケーションの場となっているのである。彼らには近隣はない。あるのはただ、リセットすれば消えてしまうバーチャルな空間の拡りである。そしてマルク・ブロックが、「敢えて言うならば、人びとは今日と比べて無限に疎遠であつた」と記す事態との類似に、一層驚かされる。インターネット拡充の趨勢は定つた。それならば、稀薄になりがちな近隣や隣人との結びつきを、インターネットによってむしろ意図的に強めようという立場を、バーチャル・ネイバーフッドと表現するというのはどうだろう。パシフィック・リム諸国の、学術とくに高等教育のためのネットワークをもつパシフィック・ネイバーフッド・コンソーシアムのなかに、人文学と宗教学に関心をもつ近隣の研究者が語らって漢字情報のプラザを開くことになった。このプラザで血の通つたバーチャル・ネイバーフッドの実現を期待している。ちなみにこの組織の訳語は太平洋近隣協会。ご関心のむきはホームページ (<http://PNCLink.org>) をご覧いただきたい。

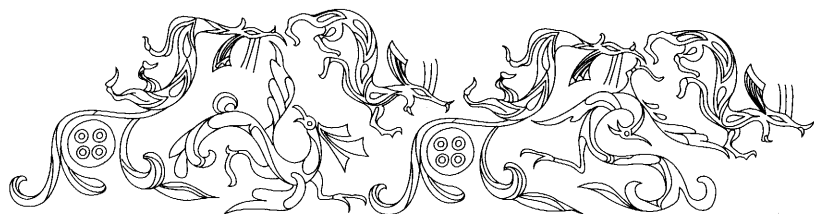


日本・沖縄・朝鮮

タカシ・フジタニ

年が明けて、僕はほぼ九年ぶりに沖縄を訪れた。九年前、僕は日本近現代の天皇と天皇制について調査をしていた。そのさい沖縄を訪問した主な目的は、沖縄の人々の抱く戦争の記憶と昭和天皇の戦争責任についての見解を調べることだった。それは僕にとって初めての沖縄訪問だった。一九八七年の「日の丸焼き捨て事件」で有名になった知花昇一氏にチビチリガマという読谷村の「集団自決」の場所を案内してもらったり、沖縄戦を経験した人々のオーラル・ヒストリーを何年にもわたり聴き取ってきた石原昌家氏と出会ったりした。こういう人々との出会いが、今も鮮明に僕の記憶に残っている。

もつとも印象深かったのは、大宜味村という、小さくて美しい、一見とても平和に見えた村で見たり聴いたりしたことだった。この村の役人たちは昭和天皇の葬儀のさい、休日を認めなかった。大葬の礼の日に平日出勤した、日本全国で唯一の役場だということをマスコミの報道を通じて知っていた僕は、いったいなぜそういう事態になったのかを知りたくて、この村を

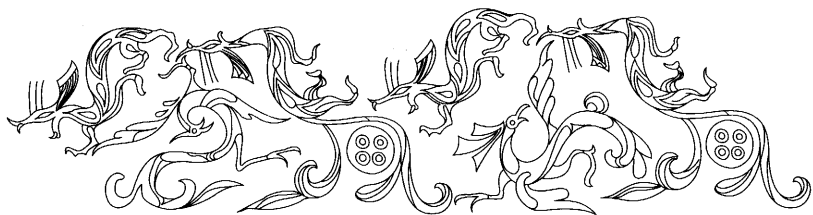


訪ねた。役場で最初にうけた説明では、単にいくつかの偶然がかさなって休日になかっただけであって、特別な意味をこめて出勤としたわけではない、ということだった。ただ、その後さらに話を続けてゆくなかで、役人のひとり、昭和天皇に対する憤りと、沖繩戦で日本兵に殺された村民の話を、非公式の話としてきかせてくれた。

しかし、僕は当時、沖繩で「沖繩人」の記憶を求めていたために、沖繩という場所に刻まれている朝鮮人の過去にはじゅうぶんに注意をはらっていなかった。僕は現在、日本の兵士として動員された朝鮮人について調べている。だから今回の沖繩見学では、軍人・軍属として動員された朝鮮人がどのように沖繩で記憶されているか、強い関心をもって戦跡や記念物を見てきた。

おそらく沖繩でもっとも顕著なかたちで沖繩戦のなかの朝鮮人を記憶している場所は、一九七五年、平和記念公園内に建立された「韓国人慰霊塔」と、一九九五年に建設された「平和の礎」のなかの韓国・朝鮮人の名前を刻んだ個所だといえるだろう。もっとも、「韓国人慰霊塔」にも問題はある。この塔は公園内の片隅に建っているために、訪問者の多くがここを訪れることなく帰ってしまう。

いっぽう、「平和の礎」では、合計二三六、〇九五の沖繩戦戦没者がこの記念碑に刻名されているが、そのうち旧植民地出身者は、台湾人二八名、大韓民国の人々五二名、朝鮮民主主義人



民共和国の人々八二名とのみ記されている。正確な数字は不明だが、おそらく何千人もの朝鮮出身の軍人・軍属と従軍「慰安婦」が沖縄戦で命を落としたはずだ。刻まれた名前があまりにも少ない。正確に調べあげることが難しいということがいちばんの理由であろう。ただ、刻まれた名前がこのように極端に少ないのは、遺族たちの抵抗が障壁となっているためでもある、ということも聞かされた。戦後東アジアの政治的状况においては、沖縄戦で亡くなったという事実は、日本帝国の協力者であったという負の歴史的立場を与えられる。だからあえてそのことを思い出したくない、というのが遺族の立場だということのようにだった。

このように、今回の沖縄への旅は、僕にとって、帝国日本が総動員した様々な地域の人々の経験を記憶することの困難さを、あらためて思い知らされるものとなったのである。



オイシイデス

ピエール・バイヤール

今回、六ヶ月間日本に滞在する機会を得て、ずいぶんいろいろと面白い経験をした。四歳の息子にとつては電車とテレビ・アニメ（彼は叡山電車と新幹線とパワーレンジャーをこよなく愛した）、一歳半の娘には日本で見るとさまざまな動物がとくに興味深かったようだが、父親もまた多くを学んだ。そのひとつが「オベントウ」の作り方である。私は、妻が仕事の都合で娘を連れてフランスに帰国したあと、一ヶ月半ほど息子と二人だけで暮らしたのだが、そのあいだ幼稚園の指示にしたがつて数回弁当を作った。かなりうまく作れるようになったと自負している。この経験は将来かならずやいろいろな機会に生かされることだろう。

日本人の（とくに女性の！）親切に何度もふれたことも印象的だった。ある雨の日、息子と連れ立ってバスに乗っていたときのことである。息子は込み合ったバスのなかで傘の骨を折ってしまい、悲しそうな顔をしていた。ところが、バスを降りたとき、停留所近くの売店の女性が駆け寄ってきて息子に子供



用の傘を差し出したのである。また別の日、今度は自転車に乗っていて雨に見舞われた。私と息子が軒下で雨のやむのを待っている、目の前に一台の車が止まった。なんと家まで送ってあげよう、しかも二台の自転車もいっしょに運んであげようというのである。

日本語にまつわる経験も忘れられない。私は今回の滞在で日本語がかなり上達したと勝手に思っているが、もともとゼロからの出発なのだから当然といえは当然である。しかし会話はむずかしい。なまじっか最初の受け答えをうまく切り抜けると、相手はこちらが相当話せるものと勘違いしてまくしたてはじめる。こちらはこちらで、相手の言うことがさっぱり理解できないまま、乏しい知識を総動員して必死でしゃべるので、そうなるとうちんぶんかんぶんである。二つのモノローグといったところだ。それぞれが一所懸命、別々のことを話しているのだから、第三者から見たらさぞかし奇妙な光景であつたにちがいない。

こんなこともあつた。ある日、私は人文研の近くのレストランに入った。メニューが読めないで、若いウェイトレスに説明を求めたが、それでもよく分からない。私はしまいにメニューに書いてあるひとつの料理の名を指差し、「オイシイデスカ?」と訊ねた。するとウェイトレスは少し困った顔をして、「チヨットマツテクダサイ」と言い残し、厨房の方へと消えた。見ると女主人とおぼしい女性となにか話している。しばらくし

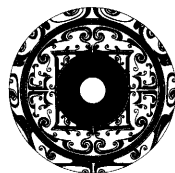


て戻ってくると、今度はきつぱりと言ったのである。「オイシ
イデス！」

(訳・大浦康介)



講演



退官記念講演

三月十九日
於 本館大会議室

中江兆民の位置

飛鳥井 雅 道

研究所は、戦中から兆民と深い縁でつながっていた。小島祐馬先生が兆民の息・丑吉の学問の師匠だったことから、丑吉の蔵書が寄贈されるといったこともあり、戦後の兆民研究は、小島先生の名著『中江兆民』ではじまったのである。ルソー三部作を終えた桑原武夫先生が、東洋のルソー・中江兆民に取り組もうとされた

とき、学士院の例会の帰途、京都によられた小島先生の講義を聞くことから会が始まったのは、偶然ではなかった。日本部助手に採用されたばかりのわたしは、明治を専攻する建前だったから、兆民研究班の事務局となり、幸い小島先生の講義のテープ起こしから仕事を始めることができた。一九六〇年の『人文学報』の小島論文はこの時の講義である。六〇年のわたしの兆民への関心は、前号の所報に書いたが、そもそもは研究所の環境の中に成立していたのだ。島田虔次、河野健二両先生の仕事もあった。

以後、長い間、兆民について考え続けてきたが、まとめる力がなかった。退職に際していくつかのポイントをわたしなりに指摘しておきたいというのが、定年講演の目標だったが、成功していない。

中江篤介の号「秋水」が、幸徳伝次郎に受けつがれたときのずれ、変質については、機会あつて別稿（『初期社会主義研究』一一号、九八年二月）に記した。伝記的側面は、『中江兆民』（吉川弘文館、一九九九年）で見えていただけとありがたい。

ここではそこに書けなかったことのアイテムのみを記す。肝心な部分がいまだに宿題として仮説のままに残っている、と痛感する。

一つは、兆民の「民権」理解について。兆民の理解

が、板垣退助的な民権理解と違うのは当たり前だが、意外にそれは、大久保利通的な国家建設への方策と共通項をもっていたのではないか。たとえば、大久保の考えた「君民共治」と兆民のそれは、かなり重なり合う部分を持つと思われる。理論的にこれを解き明かすことは、近代精神史の解明に必須であろう。

さらに、兆民の思想の目標は、必ずしも陸羯南の言う「ルーソー主義」「革命主義」ではなく、むしろ精神の自由、兆民の表現では「心思の自由」だった。民権運動の中において言えば、現実の自由党からはみ出す「理義」そのものが、兆民の言いたかったものではないか。

「理義」についての兆民の思考のプロセスの解明も、まだ、ほとんど手が着けられていない。

兆民は依然としてわたしの前に、おそらく近代日本人すべての前に、謎のまま立ちほだかっている。

夏期講座（一九九八年度） テーマ「モノとしての書物」

七月十日―十一日
於 本館大会議室

古代メソポタミアの粘土板

前川 和 也

「モノとしての書物」が今回の共通テーマであるが、古代メソポタミアの粘土板は、〈しよもつ〉の語によってイメージされているものとは、かなりちがう。粘土板は一枚、一枚を綴じあわすことはできない。円筒印章を表面に押すということをのぞけば、粘土板記録は、ステイルスで文字を彫りこむことによって成立する。また粘土板に「文学」を記録するようになるのは、かなり後になってからのことである。したがってここでは、「書物」を〈書かれたもの〉と読み、文字情報を伝達する媒体を広く指すと理解しておこう。

粘土板は、前四千年紀末よりキリスト紀元直後まで、

西アジア各地で文字記録のメディアとして広く用いられた。前一千年紀のアッシリアの浮彫りには、一人の書記が羊皮紙のうえにペンでアラム語を書き、あと一人の書記がアッカド語記録を作成するために粘土板に楔形文字を彫りこんでいる様子が描かれている。けれども、アッシリアについての同時代情報は粘土板より得る以外にはない。羊皮紙は発見されていないのである。

粘土板記録システムは前四千年紀末のシュメールで成立した。王宮や神殿で物品を数え、土地を測り、穀物を量った結果が記録されたのである。メソポタミアの出土粘土板は五〇万枚にのぼるが、ほとんどはこのような行政・経済文書であるから、これらを収めた文書庫の発掘は、枚挙にいとまがない。ところで前八世紀のニネヴェ「図書館」には文学テキストも集められていたが、古い時代にかんしては「図書館」は発見されていない。

現存するシュメール文学テキストの大半は、シュメール語が死語となった前二千年紀前半に書かれている。それ以前のシュメール時代には、特定ジャンルのしかもさほど長くない文学作品しか存在していなかったかもしれない。前二千年紀前半にシュメール文学が再編纂されたのである。既存のテキスト内容が整えら

れ、長大になり、また新ジャンルの作品も生まれたい。そして、書記の卵たちが私塾でこのような文学作品を書き写す練習をくりかえしていた。彼らの練習用教材や彼らの写本の断片群が私塾跡などから出土している。それらをつなぎあわせて、われわれはシュメール文学作品を復元しているのである。

〈しよもつ〉の特性のひとつは、同一内容テキストが多数作成されるという事実である。シュメール文学粘土板は、私的学校で生徒たちによつて複製されたといえる。

古代中国の木簡

——紙より優れた書写材料

富谷 至

歴史上、中国で紙が発明されたのは、紀元一〇五年、後漢の蔡倫による。蔡倫はこれまでの書写材料である簡牘や帛が機能的でなく、かつ不便であることから書写に適した紙を工夫して作り上げたのだと言われている。

る。

確かに紙は木や絹よりも軽くて廉価であること間違いない。しかしながら、木簡には紙にはない機能が備わっていたのである。

「封検」という木簡がある。それは、簡面を凹ましてそこに粘土をつめ、その上に印をおして封をするために使われる。場合によっては、その凹部の溝に伝達事項を記入するのだが、文書の機密性を保持するための封筒の役目をもった簡である。

また、「符」、「券」とか呼ばれる簡もある。二枚一組となつて側面に切れ込みを入れて符合することで信を得る通行証や契約書の役割をもつ簡牘である。つまり、木簡は、その上に字を書くだけではなく、文字以外の情報が刻まれた立体的な書写材料といえ、ある意味では平面的な紙よりも、よりモノとしての機能を有していたといつてもよからう。

木簡は、またカードとしても使用された。帳簿はそれらカードの集積なのだが、今日の帳簿がファイルとして綴じられるように、木簡も次々に追加されファイルとして編綴されていく。しかしファイルとして綴じられた木簡は書物として編綴された簡牘とは、編綴の仕方、収巻の様態を異にする。はじめから分量がわかつており、読むための書物簡と、整理のためのファイ

ル簡とは、同じ冊書であつても異なつた体裁を有するのである。このことを考慮に入れて簡牘をみれば、逆にそれが書物として整えられたものか、ファイルとしての記録の集積であるのか知ることができる。

文字資料は、そこに書かれた内容のみを解読していただくだけでは不十分である。どういった材料に、どのように記述され、どういった様態をもち、如何に綴じられているのか、書きモノとして総合的に理解しなければ正確に情報をえることはできないのである。

『百万塔陀羅尼』の語るところ

——再説 歴史家の視角と作家の視点——

勝村 哲也

副題を「再説 歴史家の視角と作家の視点」といたしましたのは、何年か前の開所講演でお話したのと、話の内容は異なりますが、同じ論法を使うという宣言であります。前の時は司馬遼太郎さんを取りあげました。今回も司馬さんというのはどうかなと思ひました。

が、時の人ですし、彼の直木賞作品『梟の城』の中に、どうにも気になる一節がありますので、素材にさせていただきました。その一節というのは、冒頭、伊賀忍者軍団が丸山城の織田信勝軍を闇の中で殲滅させ、信長の恨みを招くに至る有名な場面で、司馬さんが書き添えた、「そのころおい、ほそい、糸のような月が西の山の端へ落ちた」であります。新月が夜明けに沈むという現象は、自然界ではあり得ません。文学の世界では可能ですが、映画化を決意された篠田正浩監督は、さてどう撮られるのでしょうか。小説のよしあしは、作家の眼のつけどころによります。そしてココと見据えた一点の真実から自由にイマジネーションの世界に入って行きます。とんでもない大ウソが書かれても、面白ければ許されるのです。

歴史家はそうではありません。対象にある程度距離を置いて、少し冷めた眼で事態をとらえようとしますと見こう見、矯めつ眇めつするのです。ときには星を採すようにです。歴史家と歴史的事実との間には、時間的空間的に、距離があるので、うまく対象に迫れても、しっかりと像をとらえられないことがあるかも知れません。つまり実像をとらえようとして虚像を把んでしまうのです。

法隆寺の百万塔陀羅尼は、銅版による印刷物で、そ

れも輪転機を使ったのではないかと私は考えています。こう申しましても、それは突然ひらめいたものではありません。ましてや妄想ではございません。確かに通説とは異なりますし、突拍子もないと思われるのは承知していますが、三十年の間沢山の百万塔陀羅尼を見て参りまして、それが黄蘗染めの麻紙であるのに、紙の厚さはマチマチであることをノギスによって一つ一つ確かめたりしながら、観察を続けてきた結論なのです。私の記憶が呼び起す原風景には、はっきりと銅版輪転機が見えるのです。それは、曲線に接線を引くときに漸近線を求めながら次第に曲線に近づいていく手法と同じです。決して、法線が曲線に交わるその一点を問題にしている訳ではないのです。歴史家の視角と作家の視点が異なることは、ご了解いただけたとして、問題の銅版輪転機ですが、継紙を用いて印刷したこと、一経ずつ刷ったのではなく、恐らくは四経を四段に組んで印刷したこと（当然刷ってから裁断した）、長大な経がないこと、紙の上端または下端に等間隔の墨跡があること、スタンプラインが認められること、そして何よりも墨のつき方、回転によって生じたと思われる版の乱れがあることなどによって、私の結論が虚像でないことを、お示ししたいと考えております。

中国古典籍のブックデザイン

木 島 史 雄

ここでは書物を、その使い方から、読む書物／調べる書物／拜む書物の三つにわけて考えてみます。「読む書物」とは、小説などがそれで、作者の指定した流れに沿って読む事を要請し、モノとしてできるだけ流れを妨げないようにデザインされています。「調べる書物」とは、辞書、電話帳、時刻表などがそれで、使う者が一部だけを取り出して利用する書物であり、求める文字を探し出しやすいように工夫がされています。「拜む書物」とは、お経、おふだなどがそれで、内容とは関係なく、それを書き写したり、所持していたり、声に出して読んだりすることに価値があるとされる書物です。

つぎに中国の文献学の「書」と「本」の区別にも触れておきます。「書」とは、『高野聖』『歌行燈』などの、著作物の種類のことです。それに対し「本」とは、書の現実態としての版やヴァリアントのことで、自筆

原稿本／鏡花全集本などといった区別がそれに当たります。ところでこの「本」の違いは、その本が当初想定していた使われ方を反映しているということができません。たとえば、携帯に便利な文庫本は、戸外で読むことをも想定しているでしょうし、大きな活字の本は、老眼鏡世代を読者に想定しているというぐあいです。そしてそれが同書異本の場合には、書ではなく、本ごとの、想定されている読書環境の違いがきわめてはっきりと浮かび上がってくるというわけです。

例として、古典の本文と一次注釈を対象として著わされた、六世紀の二次注釈書『經典釈文』を取りあげてみましょう。この「書」については、篇章構成上の特色として、凡例の存在があげられます。文字表記の点では、朱墨のつかいわけ（本文＝墨、一次注釈＝朱）、摘字注釈（注釈の対象となった文字だけを掲出する）、篇章名標出（章の名前を見易いところに掲げる）といったことがあげられます。これらの特色から、本文と注釈とが、別々であったこと、この書物が「読む」ものというよりも、「調べる」ものという性質をつよく持っていたことが判ってきます。また「本」のレベルでいえば、この書には多くの本があり、その広がりから、『經典釈文』という書物の、時代による利用のされ方の変化を見て取ることもできます。書物の

中身ではなく、器としての性格に目を向けてみることも、書物を考える際に、たいへん有用なことなのです。

日用百科の使われかた

——十九世紀の日本——

横山 俊夫

『節用集』は十五世紀半ばの京都にうまれた和漢辞書である。語彙配列が語頭のイロハ順に、さらに人倫や草木や飲食といった部門に分けられ、話し言葉をたやすく漢字語に変換できた。当初は詩作のために写されて広まり、百年後に刊本が出た。さらに百年のちの貞享元禄頃の刊本では、字引のみならず、付録として日用百般の知識も絵入りで載りはじめる。十八世紀末までには数百ページの厚冊も登場、今世紀初めまで活用された。

十九世紀に広く用いられた厚冊本は「日用百科」と呼んでよい。ふつう、口と字引と奥の三部にわかれる。口の部には、地図や名勝図、公家大名鑑、礼法指南、

能楽手引、色紙認め様、歌仙図などがそろう。字引部は全体の七割を占め、上欄には王代一覽、書札札、寺院名籍がならぶ。また奥には、陰陽五行説にもとづく名付け指南や日選び、方忌み、男女相性といった、いわゆる「雑書」の項目がひしめく。厚冊節用集は、付録部分もあわせてみれば、書きことばを中心とした天地人三才にわたる総合礼法書であり、工業化以前の日本の文明を支えた媒体といえる。

これはしかし、内容と流布の広さからの推定ではない。実際にこの書がどのように使われたかを知りたい。そこで、残存本の手沢を調べてみた。それは使用者が折にふれひもとくうちに意図せずに残した、生活上のこだわりの記録とみなせるからである。とくに小口底面の中ほどに出る手擦れのあとを「中地小口手沢相」と名付けて注目。そこを一定条件で写真撮影し、その映像の濃淡分布をスキャナーと電算機で処理して棒グラフにしたものを集め、それらの凹凸の形状が互いにどの程度似ているかを相関計数であらわして分類してみた。

とりあげた節用集は『永代節用無尺蔵』の十九世紀の諸版。過去十年間に精密撮影した六十数点の中地小口手沢相から九範疇を析出した。それらのうち、「多筆尚雅型」と仮に名付けた一群が際立った。文事や陰

陽五行説に執心な、いわば王朝期の風雅をしたう暮らしてある。

デジタル化という抽象化、単純化に助けられての大量高速演算にうつつを抜かす間に、機器のほうからさまざまな「託宣」をうけた。九範疇それぞれに含まれた事例群には、ある程度は地域や職業による偏りがうかがえそうであるが、それらは排他独占的ではない、との発見もそのひとつであった。

なお、姉妹百科書といえる『大雑書』の使われかたについても、沖繩をふくむ各地での最近の調査の知見を語った。こちらの方は標準的な刊本を定めかねることに加えて、諸家残存本の多くが摩耗破損はなはだしく、特定刊本の手沢相のデジタル化といったような、機械が喜ぶ手法は、今のところあきらめている。

印刷文化と手稿 マニユスクリ

——ヴァレリーにおける「モノとしての書物」——

森 本 淳 生

近代における書物の「モノ」としての側面を考えるとき、当然考慮に入れなければならないのは「印刷されている」という点である。一九世紀の印刷技術の革新と出版流通革命は書物を産業資本主義的な大量生産・大量流通の対象とした。書物はいわば「商品」という「モノ」になる。このような中、『詩学講義第一講』においてヴァレリーは、文学作品の制作、受容、評価を、生産、消費、価値といった経済学的な用語で考察した。生産され、流通過程にのせられて消費される作品は、まさに「モノ」商品であり、文学作品の価値もこのような交換過程における他者からの評価によって交換価値として決定されるのである。従って制作そのものもそのような交換過程から独立したものはありえない。交換過程から独立した「芸術のための芸術」や「純粹詩」などは不可能だということをヴァレリーはよく知っていたのである。にもかかわらず、

彼は文学の「精神化」を試みる。作品とは結局のところ「精神の作品」にほかならず、「精神の行為」においてのみ存在するのである。ところで、ヴァレリーの有名な創作理論に「作品の完成はありえない」というものがある。作品の「完成」とは作品の偶発的な「放棄」ではない。制作それ自体は「完成」と無縁であるから、制作の現場としての手稿は作品の完成がまったく顧慮されないような「書くために書く」という倒錯的なエクリチュールになるほかはない。ヴァレリーの『カイエ』もこのような場として理解できる。『カイエ』とは、偶然的な完成を目的とするような「外的生産」に捧げられるものではなく、純粹に自分の精神と向きあい、「生まれたての状態」にある諸觀念を精神のもつ無秩序そのままに書きつける場なのである。その意味で、通常の書物が何らかの首尾一貫性を持ち、常識的な作品が何らかの秩序や終結を含まざるえないのと異なり、『カイエ』はひとつの「反作^{マニスクリ}品」「反書物」であるといえるだろう。そして手稿が、書き手の目の前にある紙に自分の手で文字を書きつけるという自己に親密な行為によって書かれることを考えれば、手稿とは、高度の具体性を帯びた事物という意味での「モノ」であることが分かる。手稿とはまさに「私のモノ」なのだ。すなわち、「モ

ノ商品」たる「書物」に対して、「モノ手稿」の領域が、産業資本主義時代における文学者の私的個人的領野として見出されたのである。

開所記念講演会（一九九八年度）

十一月五日
於 本館大会議室

卜辞の法表現

森 賀 一 恵

卜辞の命辞（占った事柄を記すことば）では、「不」「弗」類の否定詞が、殷人の意志で制御することのできない「雨」「年を受く」「疾」「死」などの動詞を否定する場合に用いられるのに対し、「勿」類の否定詞は「狩」「往」「侑」（祭祀の一種）など、殷人の意志で行うことのできる動作の否定に用いられる。ただし、同じ卜辞でも、占辞（占いの吉凶を判断することば）・用辞（占った結果、行ったことを記すことば）における否定詞の使い分けは、命辞と異なり、用辞では殷人の意志で制御できる動作「狩」「往」「侑」などが「不」で否定され、占辞では殷人の意志では制御できない「疾」「死」などが「勿」で否定される。また、

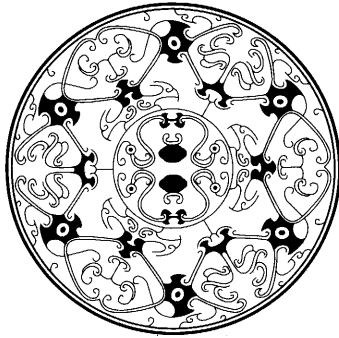
主語、動詞、目的語などあらゆる統語成分の前に置かれ、その語を強調する役割を果たす虚字「惟」「恵」にも否定詞と平行する使い分けが見られる。命辞では、「惟」が殷人の制御できない天候や豊作や死や病について述べる文に用いられるのに対して、「恵」は殷人の意志による行為である往来・狩獵・祭祀などについて述べる文に用いられ、占辞・用辞ではその逆になっているのである。この否定詞や虚字の命辞における現れ方の違いは、「勿」類否定詞および虚字「恵」が意志または必要を表わす法的な(modal)語であることによると考えられているが、「恵」の否定形が「勿惟」であることもその説を補強するもので、用辞で殷人の行為の否定に「不」類が用いられることについても、過去の行為は「しよう」という意志や「しなければならない」という必要を表す法に関わらないからだという説明が成り立つ。占辞において「死」「疾」などの否定に「勿」が用いられることについては、意志により制御することのできる動作の否定に用いる「勿」で否定することによって望ましくないことが起こることを阻止しようとする呪文だ、「勿」が願望の意味を表すのだなどと解釈されている。しかし、英語の may や must のように義務論的な法と認識論的な法が同じ語形で表されることは多くの言語に普遍的に

見られる現象であり、古代漢語の「宜」「当」「将」「欲」なども二種の法的意味を表わしうることから、卜辞の「勿」「惠」も二種の法を表しうるものだった、つまり、命辞の「勿」は意志や必要性などの義務論的な法を表し、占辞の「勿」は蓋然性・可能性などの認識論的な法を表したと解釈することも可能だろう。

軍事共同体の文化人類学

——『暴力の文化人類学』以後

田 中 雅 一



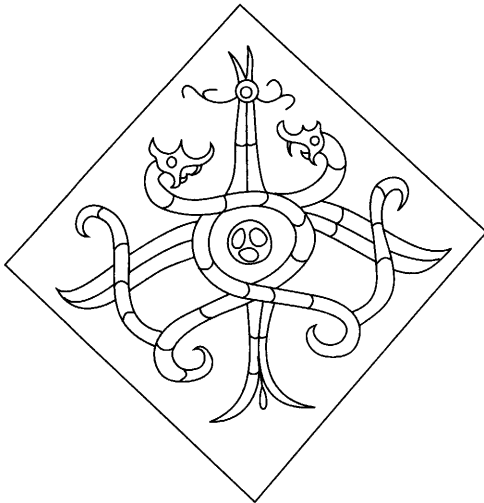
私は平成二年（一九九〇）から四年間『儀礼的暴力の研究』というタイトルの研究会を組織し、今年の春にその成果である『暴力の文化人類学』という論文集を交換した。そこに収録されている一五本の論文のうち軍隊にふれているのは二本だけである。その理由は元々この研究会が儀礼の中の暴力や儀式化された暴力に焦点を当てていたということがあり、暴力を行使する集団を対象にはしていなかったということがある。三年前から取り組み始めた在日米軍の研究はこの『暴力の文化人類学』の延長線上にある。

今日の日本人は、米軍だけでなく軍隊一般に拒否感覚をもっている。その理由は、まず憲法上問題のある自衛隊とそれよりさらに問題の多い米軍を研究対象とすると、その存在を認めてしまうことになるのではないかという危惧であろう。つぎに、防衛を掲げていても実際には侵略に走る軍隊というものに戦後の日本人

は辟易している、ということがある。平和主義という視点からいえば軍隊は唾棄すべきものであり研究に値しない、というわけです。しかし、これは一〇万人以上駐留している米軍とその関係者たちをまったく無視することであり、それは結果日米双方にとって不幸なことではないか。さらにまた、ここで私が意図しているのは軍隊の軍事的側面や政治的側面ではなく、あくまで人類学的視点から浮かび上がってくる生活共同体としての軍隊である、ということも強調しておきたい。

在日米軍ということばを分解するとうるなるだろうか。在日・米・軍と三つに分かれます。これがそのまま研究視点でもある。すなわち順番を反対にすると、一点目は軍、軍隊として在日米軍をとらえる視点、二点目は米、アメリカ研究への新たな切り込みという視点、三点目は在日、日本社会のマイノリティという視点である。そしてこれらのテーマで重要なのは、在日米軍が戦闘部隊とその支援組織からなるたんなる軍隊ではなく、独自の、しかしまったく外部から隔離されたのではない社会（生活共同体）を形成しているという事実である。この共同体をここでは軍事共同社会と呼ぶ。それは他集団への戦闘・暴力行使を専門とする職能成員とその家族からなる。軍事共同社会は世代的にも継承されている。本講演ではとくに、共同社会と

しての在日米軍の全体像と日本人との交流、米国での価値観の変容と軍隊、とくに女性化と家族を中心に話を進めた。



戊辰戦争と徳川慶喜

佐々木 克

意図していることは、戊辰戦争を、幕末の政治過程の延長線上に位置付けて、これまでとは違った視点から検討してみよう、という試みであり、試論である。

これまでの戊辰戦争研究（戦史類や藩史、地域史に属するものを除く）のほとんどが、戊辰戦争を日本近代の出発点に位置付け、近代からの視点で、主として近代史の研究者によってなされてきた。私の旧著『戊辰戦争』（一九七七）もその一つであるが、これにたいして近世史の側からみた戊辰戦争や、近世史の研究者からの戊辰戦争にかんする発言は、ほとんどないのが現状である。

あらためて述べるまでもなく、戊辰戦争は、日本の近世から近代への転換点で起こった戦争であり、近世の最終段階での戦争であった。したがって、なぜ戦争というような、政治的対立の極限状況が生み出されたのか、その理由を、幕末における政治的対立や社会状

況のなかから、探り出すという重要な作業が必要となってくる。

ところで、幕末の日本国家と主要な政治勢力は、重要な国家的課題に直面していた。その課題とは、①人心の一致、②合議制の確立（専制否定）、③内乱の阻止、以上の三点である。この三つの課題は、ペリー来航後の国難に際して、この課題を達成・実現して、挙国一致の体制を築かなければ、外圧に対抗できないという切実な認識のもとで唱えられたものであるが、しかしその実現の方策をめぐって、政治的対立が起こっていたのである。

ところが幕末の日本国家と主要な政治勢力は、自らに課せられたこの国家的重要課題を、解決・達成できなかった。そのなかで、とくに幕府と事実上幕府を代表していた徳川慶喜が、その阻止要因をつくり、責任が重いと言う主張が、慶応三年後半期の世論となり、薩長倒幕派が幕府の解体・將軍慶喜追放に立ち上がり、戦争となったのである。

彙報 (一九九八年一月より十二月まで)

おくりもの

。おくりもの・上山春平名誉教授は、勲二等旭日重光章を受章(四月二十九日)。

訃報

。林屋辰三郎名誉教授(八三歳)は、二月十一日逝去。
。藤枝 晃名誉教授(八六歳)は、七月二三日逝去。

人のうごき

。飛鳥井雅道(日本部)教授は、停年退官(三月三十一日付)京都大学名誉教授の称号を授与(四月一日付)。
。横山俊夫(日本部)助教授は、教授に昇任(四月一日付)。
。勝村哲也(附属東洋学文獻センター)助教授は、教授に昇任(四月一日付)。
。山路勝彦関西学院大学教授は、併任教授(比較文化研究部門、四月一日)一

九九九年三月三十一日)。

。高木博志北海道大学助教授は、当研究所助教授(日本部)に転任(四月一日付)。

。小牧幸代氏を助手(西洋部)に採用(四月一日付)。

。東郷俊宏氏を助手(東方部)に採用(四月一日付)。

。古勝隆一氏を助手(東方部)に採用(四月一日付)。

。山室信一(日本部)助教授は、教授に昇任(五月一日付)。

。塚本 明三重大学助教授は、併任助教授(比較文化研究部門、五月一日)一九九九年三月三十一日)。

。船山 徹(東方部)助手は、九州大学文学部助教授に昇任(十月一日付)。

海外での研究活動

。田中雅一助教授(西洋部)は、文部省科学研究費補助金により、平成九年十二月二六日大阪発、マドラス大学にお

いて巡礼資料の収集、アンナマライ大学において寺院祭の調査、ハワイ大学、ヒロ周辺においてハワイからインドへの巡礼者の調査を行い、一月二三日帰国。

。高嶋 航助手(東方部)は、一月九日大阪発、南京博物館、中国社会科学院歴史研究所において文献資料の収集を行い、一月二三日帰国。

。瀧井一博助手(日本部)は、平成九年三月二八日大阪発、ウィーン大学においてオーストリアにおける国家学思想の展開と日本への影響についての研究を行い、一月二八日帰国。

。高田時雄教授(東方部)は、文部省科学研究費補助金により、二月十四日大阪発、北京大学において古典学に関するレビューを受け、二月十八日帰国。

。藤井正人助教授(西洋部)は、在外研究員旅費により、一月十日大阪発、ハーヴァード大学、ヘルシンキ大学においてヴェーダ・テキストの生成と転移に関する先端研究の動向調査と研究協力、ユトレヒト大学図書館においてカーラント博士の資料とデータの点検

を行い、三月九日帰国。

。岡村秀典助教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、二月二六日大阪発、河南省文物考古研究所、焦作市文物考古工作队、北京大学、中国国家文物局において考古学的調査を行い、三月十四日帰国。

。富谷 至助教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、三月二日大阪発、オランダ国立博物館、スウェーデン国立民族学博物館、大英博物館において中央アジア出土考古文物の調査を行い、三月十四日帰国。

。木島史雄助手（東方面）は、三月九日成田発、フランス国立図書館、大英図書館、大英博物館、オックスフォード大学、ボドレイアン図書館、ロンドン大学、デビッドコレクションにおいて敦煌文書及び書物史研究のための西洋古典籍研究を行い、三月二五日帰国。

。井狩彌介教授（西洋部）は、三月十六日大阪発、ハーヴァード大学において研究交流の打合せを行い、三月二五日帰国。

。高田時雄教授（東方面）は、文部省科

学研究費補助金により、三月十七日大阪発、ローマ国立図書館、パレルモ市立図書館、キヨソネ博物館において漢籍調査を行い、三月三十日帰国。

。麥谷邦夫教授（東方面）は、三月二五日大阪発、ライデン大学において貝原益軒シンポジウム及び資料収集を行い、四月一日帰国。

。荒牧典俊教授（東方面）は、二月九日大阪発、カリフォルニア大学バークレー校において Numata Visiting Professor として研究及び講演を行い、五月十日帰国。

。森本淳生助手（西洋部）は、四月二二日大阪発、フランス学士院図書館、フランス国立図書館においてポール・ヴァレリーに関する研究及び資料収集を行い、五月十日帰国。

。田中 淡教授（東方面）は、五月五日大阪発、大明宮含元殿遺跡において同遺跡保存整備に関する日中専門家会議に出席し、五月十日帰国。

。小南一郎教授（東方面）は、五月六日大阪発、西ミシガン州立大学において第三三回中世学国際会議に参加し、五

月十二日帰国。

。狭間直樹教授（東方面）は、五月十四日大阪発、香港中文大学において戊戌維新運動史国際学術研討会に参加及び研究資料収集を行い、五月十八日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、五月十五日大阪発、台湾中央研究院訊科研究所において新漢字コード系の研究を行い、五月十九日帰国。

。麥谷邦夫教授（東方面）は、五月十八日大阪発、北京図書館において資料収集、北京飯店において「宗教と科学による文化交流」シンポジウムに出席し、五月二四日帰国。

。富永茂樹助教授（西洋部）は、在外研究員旅費により、五月二六日大阪発、パリ第八大学において COV&R 年次大会に参加及び研究報告、フランス国立図書館において資料収集を行い、六月五日帰国。

。船山 徹助手（東方面）は、五月八日大阪発、ウィーン大学チベツト学仏教学研究所においてインド仏教哲学の研究を行い、六月九日帰国。

。荒牧典俊教授（東方面部）は、六月三日大阪発、スウェーデン・ルンド大学神学・宗教学部においてP・S・ジャイニ教授退任記念国際会議に出席及び研究発表、ブリティッシュライブラリーにおいて敦煌写本の調査を行い、六月十日帰国。

。森賀一恵助手（附属東洋学文献センター）は、平成九年八月二六日大阪発、北京大学中文系において古代中国語に関する研究を行い、七月十五日帰国。

。矢木 毅助手（東方面部）は、二月十六日大阪発、慶北大学教師範大学において朝鮮初期刑罰制度の研究を行い、八月十五日帰国。

。前川和也教授（西洋部）は、七月十三日大阪発、大英博物館において館蔵シユメール粘土板文書の研究を行い、八月十七日帰国。

。岩井茂樹助教授（東方面部）は、文部省科学研究費補助金により、八月十日大阪発、上海図書館において資料調査、光明大酒店において研究報告及び學術調査を行い、八月二二日帰国。

。田中 淡教授（東方面部）は、八月十六

日大阪発、北京香山飯店において第一回中国建築史国際研討会に参加し、八月二二日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、七月三十日大阪発、シンガポール国立大学においてインド系移民の調査、ハワイ大学においてヒンドゥー僧院の調査、ブリティッシュ・コロンビア大学、トロント大学においてインド移民の調査を行い、八月二六日帰国。

。狭間直樹教授（東方面部）は、八月十九日大阪発、北京大学において戊戌維新一百周年国際學術討論会に参加及び研究資料収集を行い、八月二六日帰国。

。勝村哲也教授（附属東洋学文献センター）は、文部省科学研究費補助金により、九月四日大阪発、サンフランシスコ大学リッチー研究所・カリフォルニア大学バークレー校において新漢字コードのジョイント研究を行い、九月十一日帰国。

。小山 哲助教授（西洋部）は、八月三十日大阪発、ポーランド国立図書館において近世ポーランドにおける情報流

通に関する史料調査を行い、九月十三日帰国。

。狭間直樹教授（東方面部）は、九月八日大阪発、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校において「梁啓超の研究」シンポジウムに出席、カリフォルニア大学バークレー校において資料収集を行い、九月十七日帰国。

。森 時彦教授（東方面部）は、九月五日大阪発、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校において「梁啓超の研究」シンポジウムに出席、カリフォルニア大学バークレー校において資料収集を行い、九月十八日帰国。

。水野直樹助教授（日本部）は、文部省科学研究費補助金により、九月十一日成田発、ロシア現代史文書保管研究センターにおいてソ連共産党・コミンテルン朝鮮関係文書の調査を行い、九月二二日帰国。

。金 文京助教授（東方面部）は、九月十五日大阪発、北京師範大学古籍研究所において国際元代文化學術研討会に出席、北京図書館において資料収集を行い、九月二二日帰国。

。宇佐美齊教授（西洋部）は、九月一日大阪発、ボンピドゥー・センター、ジャック・ドゥー・セ文学図書館においてアヴァンギャルド芸術研究に関わる調査及び資料収集、トゥールーズ・ル・ミリュ大学において日仏比較近代詩研究に関わる研究集会に参加し、九月二三日帰国。

。高田京比子助手（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、九月八日大阪発、バドヴァ大学において中世ヴェネツィア史についてレビューを受け、九月二三日帰国。

。岡村秀典助教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、九月十三日大阪発、河南省文物考古研究所において焦作府城遺跡の調査、北京大学において調査打合せを行い、九月二六日帰国。

。富谷 至助教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、九月二三日大阪発、大英図書館、スウェーデン国立民族学博物館、デンマーク国立博物館において楼蘭ニヤ出土文書の調査及び研究打合せを行い、十月三日帰国。

。谷井陽子助手（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、十月十八日大阪発、社会科学学院歴史研究所において明清時代檔案資料収集を行い、十月二四日帰国。

。横山俊夫教授（日本部）は、学長裁量経費により、十月三十日大阪発、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学において国際シンポジウム「人文学の新時代」準備会議に出席し、十一月九日帰国。

。岡村秀典助教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、十月十五日大阪発、河南省・焦作市文物考古工作队、北京大学において焦作市府城遺跡の発掘調査を行い、十一月十七日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金により、十一月八日大阪発、トロント市内において国際学術研究「環太平洋地域の文化とシステムのダイナミクスに関する研究」の調査を行い、十一月十八日帰国。

。籠谷直人助教授（日本部）は、十一月十五日大阪発、台湾中央研究院台湾史研究所籌備処において第十一回太平洋

国際科学会議での報告を行い、十一月十九日帰国。

。岡村秀典助教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、十一月二二日大阪発、香港中文大学において南中国近隣地区古文化研究国際学術会議に出席し、畜産と動物犠牲の考古学研究のレビューを受け、十一月二五日帰国。

。高嶋 航助手（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、十二月八日大阪発、北京大学、河北省檔案館、上海図書館において清代の人口資料及び中国近代社会史関連の資料収集を行い、十二月二七日帰国。

。小南一郎教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、十二月十九日大阪発、湖南省文物考古研究所、城頭山遺跡において中国新石器時代の都城遺跡の調査を行い、十二月二七日帰国。

外国人研究員

。金 冲及 中共中央文献研究室副主任
東アジア世界の転折点——一九二七年の
中国と日本——の研究

(比較社会客員部門)

受入教官 森教授

期間 一月十日～七月十日

。Takashi Fujitani カリフォルニア大
学サンディエゴ校歴史学部準教授
太平洋戦争における民族的マイノリテ
イ出身兵士の比較研究

(日本学客員部門)

受入教官 水野助教授

期間 六月十九日～

。Pierre Bayard パリ第八大学教授
文学と精神分析理論

(比較社会客員部門)

受入教官 大浦助教授

期間 七月二十日～

一九九九年一月二十日

招聘外国人学者

。Klaus Kracht ベルリン＝フンボル

ト大学教授

日本の礼法ならびに年中行事に関する
研究資料収集

受入教官 横山教授

期間 三月十日～四月十一日

。金 慶南 釜山大学校韓民族文化研
究所研究助教

一九三十一～四十年代における朝鮮の綿
紡績工業化と労働力再生産

受入教官 水野助教授

期間 四月一日～

一九九九年三月三十一日

。Gerhard Leinss テュービンゲン大学
日本研究所専任講師

近代日本の暦と大雑書についての基礎
研究

受入教官 横山教授

期間 四月六日～七月三十一日

。Kevin M. Doak イリノイ大学歴史学
部助教授

明治期における国民国家形成と市民社
会の問題

受入教官 山室教授

期間 五月二一日～八月十七日

。G. Aurora Testa イタリア国立東方

学研究所員

唐代洛陽城の考古学的研究

受入教官 栗山教授

期間 九月二十日～

一九九九年九月十九日

。Francois Daniel Voegeli ローザンヌ
大学文学部博士課程

ヴァードゥーラ・シユラウタスートラ
の研究

受入教官 井狩教授

期間 十一月一日～

一九九九年十月三十一日

。陳 金華

日本の初期天台密教の形成及びそれと
中国仏教の關係

受入教官 荒牧教授

期間 十一月十八日～

一九九九年十一月十七日

外国人研究生

。Martin Delhey

『瑜伽師地論』三摩泗多地の研究

受入教官 荒牧教授

期間 十月一日～

一九九九年九月三十日

。Bogna Jankowska

日本文学（宮沢賢治に関する研究）

期間 十月一日～

二〇〇〇年三月三十一日

東洋学文献センター講習会

。一九九八年度漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）

第一期（九月二八日）

図書館と情報システム（講演）

大型計算機センター教授

金澤正憲

東洋学文献類目の編纂とフォーマット（講義）

村田康彦

東洋学文献類目冊子体の作成（講義）

義）

大型計算機センター教授

金澤正憲

業務分析と情報化（講義）

大型計算機センター教授

金澤正憲

第二期（九月二九日）

漢字コード―外字の処理―（講義）

大型計算機センター教授

金澤正憲

電子漢字（ekanj）（講義）

同志社女子大学非常勤講師

丹羽正之

日・中・台における漢字コードの規格（講義）

大型計算機センター助教授

安岡孝一

漢字コードの問題点とISO 10646 UCS（講義）

学術情報センター教授

宮澤 彰

データベース検索（一）（実習）

最近のデータベースの動向（講義）

第三期（九月三十日）

大型計算機センター助手

川原 稔

情報ネットワークとインターネット（講義）

大型計算機センター助教授

岡部寿男

データベース検索（二）（実習）

第四期（十月一日）

抄本（古本書）のデータベース化と画像処理（講義）

大阪市立大学教授

柴山 守

古典データベースとその利用（講義）

統計数理研究所教授

データベース検索（三）（実習）

第五期（十月二日）

大型計算機センターのネットワーク（講義）

大型計算機センター教授

金澤正憲

井波陵一

小野和子

（講義）

四部分類―経・史・子・集

井波陵一

（実習（一）

第二期（十一月十日）

経部・小学書（講義）

東北大学文学部教授

花登正宏

wwによる情報サービス（講義）

大型計算機センター助教授

澤田 篤

。一九九八年度漢籍担当職員講習会（初級）

級）

第一期（十一月九日）

漢籍の話（講演）

京都橘女子大学教授

小野和子

（講義）

四部分類―経・史・子・集

井波陵一

（実習（一）

第二期（十一月十日）

経部・小学書（講義）

東北大学文学部教授

花登正宏

カードの作り方(講義) 梶浦 晋

実習(一)

第三日(十一月十一日)

史部書(講義)

浅原達郎

実習(二)

第四日(十一月十二日)

子部書(講義)

武田時昌

実習(四)

第五日(十一月十三日)

仏書(講義)

東京大学東洋文化研究所教授

丘山 新

お客さま

三月六日 フランス学士院会員 Collet

Caillaud(井狩班「インド文化史の諸問題」の研究活動の一部として、講演会を西館大会議室で開催した。)

三月三十日 中国社会科学院外事局副局

長 孫新、同副主任 張昌東、同人
事局副局長 韓乃錦、同管理局副局
長 賈仁忠、同會計検査局副局長
劉克平、同外事局職員 張宵松(山
本所長、狭間が応接した。)

四月十三日 トゥールーズ・ル・ミライ

ユ大学教授 Jean Sarracini アル
ベール・カミュ研究者として知られ
る。本館大会議室において「フラン
ス人の俳句観」と題する講演を行っ
た。

十月六日 フランス国立古文書学校学長

Yves-Marie Berce フランス近世政
治史、とりわけ農民反乱の研究で知
られる。「コミュニケーションの社
会史」班と関西フランス史研究会
(代表・服部春彦氏)との共催で、
「ルイ十四世の治世の政治的意味」
の講演会をもった。

十月八日 グラスゴー大学社会学部副学

長 Robert Miles(山本所長、富永
が応接した)

十月十三日 フランス国立社会科学高等

研究院研究部長 Christiane Klapi-
sch-Zuber ルネサンス期イタリア都
市の研究(とりわけ女性史、家族史
研究)で知られる。「コミュニケー
ションの社会史」班と日仏共同研究
「周縁・媒介・アイデンティティ研
究」グループ(代表・脇田晴子氏)
との共催で、「十四、十五世紀イタ

リア都市の公共空間における女性」
の講演をしていただいた。

十一月十一日 中国社会科学院秘書長

郭永才、同近代史研究所所長 張海

鵬、同法学研究所研究員 劉楠来、

武漢大学副学長 胡德坤、南京大学

歴史研究所所長 張憲文、北京師範

大学歴史系教授 王檉林、大連民族

学院副院長 閔捷、吉林社会科学院

研究員 解学詩、中国社会科学院中

日歴史研究中心弁公室主任 王正、

同秘書 周穎昕(井上清名誉教授、

山本所長、狭間、森が応接した。)

十一月二十六日 国際連合大学長 Dr. J.

A. van Ginkel、同令夫人、東京大

学教授 小堀巖(山本所長、田中淡

が応接した。)

十二月十一日 中国社会科学院文学研究

所研究員 董乃斌、陶文鵬(勝村、

金が応接した。)

研究所のインターネット・ホームページ

本研究所では、1997年からインターネット・ホームページを設け、研究所に関するさまざまな情報の提供を行なっています。研究所・スタッフ紹介をはじめ共同研究、図書室、東洋学文献センター、刊行物などの情報が掲載されています。

また、「中国関係電子テキスト・アーカイブ」「西域行記データベース」などのデータベースのほか、教職員個人のホームページにも「漢籍テキスト・データベース」(麥谷邦夫)、「e 漢字」(勝村哲也)、「戦前日本在住朝鮮人関係新聞記事検索」(水野直樹)、「南インド寺院管理判決文データベース」(田中雅一)などの学術データベース類があり、インターネットを通じての学術情報の発信に努めています。

本誌「人文」も、本号分からホームページに掲載する予定です。

情報満載のホームページを一度ぜひご覧ください。URL は、以下のとおりです。

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp>



English version is [here](#)
1999年1月20日更新

●最新情報(99/1/20更新)

研究所紹介

- 沿革
- 組織一覧
- 交通と地図

スタッフ紹介(個人研究・主要業績紹介)

- 日本部
- 東洋部
- 西洋部
- 客員部門

共同研究紹介

- 日本部
- 東洋部
- 西洋部

共同研究班のページ

- 日本部
- 東洋部
- 西洋部

テキスト・アーカイブ

- 中国関係
- 西域行記データベース
- e漢字

図書室

- お知らせ(98/2/12更新)
- 利用案内
- 本館図書室の蔵書

東洋学文献センター

- お知らせ(98/6/23更新)
- 利用案内 蔵書と資料
- 東洋学文献類目検索

事業活動

刊行物

- 研究報告
- 調査報告
- 資料集・索引等

紀要総目次

- 東方學報(京都)
- 人文學報
- ZINBUN

お知らせ

- 研究者公募など(99/1/20更新)

研究所教職員のホームページ(98/10/7更新)

六祖慧能は実在する

荒 牧 典 俊

「六祖慧能は実在する」といままさらながら、若い友人に話しかけたところ、かれは反論した「先生、そんなこと言っても、いまだ、かつて六祖慧能の実在を疑った人は、いませんよ」と。たしかに、その通りだが、しかし他方、近代の敦煌禅文献の発現とともに急速に進展した文献批判の結果、『六祖壇経』をはじめとする諸史料が、ほとんど完全に疑わしくなってしまうて、六祖慧能の実像が、ぼやけてしまったことも確かだ。あたかも六祖慧能が実在しなかったかの如くに、黙殺されている。

北朝後半期以来の仏教思想史の根幹の動きは、『大乘起信論』の一心の哲学に帰結する、その一心の哲学は、北宗禅の一心の禅定修行へとつながる、と思想史の事実を確認してきて、いま、六祖慧能が、敦煌出土の『神会語録』の影にかくされているようでは、本当に困る。六祖慧能のところで根本転回が転回しているのでない限り、宋・之間、王維、杜甫における唐詩の成

立も、呉道玄、王維などにおける水墨山水画の成立も、理解できなくなる。まして南嶽懷讓から馬祖道へ、青原行思から石頭布遷へと伝心された南宗禅も、始源が喪失されてしまう。六祖慧能において転回した根本転回を、歴史事実として理解するには、どうすべきか。いかに断片的であろうと、歴史事実を一つ一つ確認していくより他ない。そうすれば、風幡問答も、則天武后の招請も、おそらく伝衣も歴史事実になるだろう。そして『祖堂集』に伝えられた六祖慧能と弟子達との問答の言葉も、実録であるにちがいない——それらによつて六祖慧能において「空」であることとすることによつて根本転回して、近世文化を創造する根源のコミユニケーション、「説法」（即「仁」）の場が開けていく、というところまで、共同研究の結論を究明していきたい。

《発見術》としての人文学へ

上野 成利

「テキストの政治学——危機の時代における理論と批評」という共同研究班を、この四月より新しく発足させた。研究班のタイトルとしては、いくぶん座りの悪い名称ではあるだろう。ここに掲げられているのは、「テキスト」に重層的に刻印された「政治性」を読み解いてゆくという作法、要するに研究のスタイルであり、内容ではないからだ。

もとより共同研究であろうとする以上、扱うテキストの範囲もある程度は限定されていなければならない。この研究班が対象としているのは、二〇世紀前半に登場した哲学や社会学論、さらには科学論や文芸批評のテキストである。この時期に広く流通した「ヨーロッパ諸学の危機」や「近代の超克」といった《脱—近代》の言説のうちには、《近代》が自己を否定することとで延命を図るといふねじれた構図がみてとれるのではないか、そしてそこにこそ《近代》に固有の思考の回路を探るべきではないのか、と考えたのである。

これまでのところは、主に三〇年代の日本のテキストを読みついできた。保田與重郎の悪文に頭をひねったりしてもいる。テキストの選定からして手探りの状態だ。とはいえ、そうした試行錯誤のなかからこそ新たな問題が見えてくるのではないか、という思いがないでもない。《発見術》という古風な人文学のスタイルを実践してみよう、というわけである。うまくいけば新しい星座が見つかることもあるだろう。この研究班にも少し気のきいた名前が与えられるとしたら、あるいはその時なのかもしれない。

進化論を読む育種家たち

武田 時昌

今日において、研究者にもっとも支持され、一般にも広く浸透している科学理論といえば、ダーウィンの進化論であろう。その社会的、文化的な影響を考究するための準備として、一年間『種の起源』に遡って勉

強してみようというのが、「進化論を読む」研究班の目的である。

毎回、ダーウィン、スペンサー、ヘッケル、今西錦司等の進化論者の著作を一つずつ取り上げ、読破していく（スゴイ！）。名前だけしか知らなかった科学書を実際に通読すると、小さな発見がいくつもある。それを各人が出し合ってあれこれ討論していると、科学者の実像と進化論の本質が少しずつ鮮明になる。

参加者は大勢というわけではないが、同一のテキストに対して、個々の読み方、味わい方がまったく異なり、思いもよらない発言が続々と出現する。宮沢賢治の詩の解釈を「出題」する発表担当者もいれば、脳の構造、生殖器官の機能といった特定の部位に疑問の鋭いメスを入れる人々もいる。この書名のフランス語はちよつとおかしいという講評も出る。

その読書のあり方は、生物学の話題を自己の庭に植え替えて鑑賞するという「人為選択」の有意性を感じられる。しかし、ベクトルを異にする興味と見解が競い合い、交雑し、やがて淘汰されると、これまでの進化論史研究にない議論、新種の造花が見事に咲く。

東方部の共同研究しか参加したことがなかった私にとって、きわめて刺激的事であることは言うまでもない。彼らは、まさにダーウィン進化論に論拠を提供した、

腕利きの育種家の末裔だ。この読書会で拾い集めた種が、それぞれの研究フィールドでいったい何に進化していくのか、とても楽しみである。

日本の植民地支配

——朝鮮と台湾——

水野直樹

昨年四月から開始したこの共同研究班には、日本史・朝鮮史・台湾史の研究者が参加している。このように地域を越えた研究者が集まる研究会は、これまで他になかったといつてよい。同じ日本の植民地支配を受けた朝鮮と台湾の歴史を研究する者なら、交流があつてよさそうだが、実はそれほど深い交流は行なわれてこなかった。もちろん「植民地史」「東アジア」の名を冠した研究会はいくつかあり、それなりの意見交換はなされているが、定期的に行なわれる研究会や共同研究として運営されているものはないようである。私がこの共同研究を呼びかけた理由の一つは、朝鮮

史研究者と台湾史研究者の間で密度の高い交流・意見交換ができないものか、と考えたところにあった。幸い近年、朝鮮史だけでなく日本支配下の台湾の歴史を専門とする研究者が増えてきており、共同研究を進めるための条件が整いつつあるといつてよい。

共同研究を始めたもう一つの理由は、植民地に関する研究方法・視角や資料について、日本史研究者の意見・情報を聞きたいと思ったことにある。植民地支配の問題を説明するには、日本史研究者との協同作業がなされねばならないことはいうまでもないが、資料の面でも日本史研究者の知識を借りなければならぬ。しかし、これも従来活発であったとはいえない。

そもそも日本史・朝鮮史・台湾史というような領域設定をしていること自体に大きな問題がある。もちろん、班員の中には領域を越えた視点から研究を行なっている人もいる。しかし、これまでの研究がそのような領域設定に縛られていたことも確かである。このような枠組みに縛られた研究状況を打ち破ることができるかどうか、共同研究の課題の一つといえるかもしれない。

それぞれの領域・分野からでは見えない事柄を指摘しあい、知見を共有する研究グループを植民地史に関して築くことができれば、この共同研究は半分くらい

は成功したことになるのではないか、と思っている。
私のもくろみが実現するかどうか、共同研究の歩みは緒についたばかりである。

所のうち・そと

断章 — ある問答から

富 谷 至

ストックホルムの国立民族学博物館に未発表の五枚の紙文書がある。一九三〇年代に西北科学考查団が楼蘭にて入手したとされる三、五世紀の楼蘭古紙とおぼしきものだが、果たしてそれが本物かどうか分からない。紙の科学的分析ということで、東京国立文化財研究所、コペンハーゲン国立博物館の紙の専門家を訪ねて、東奔西走している。以下は、ある時の会話である。

楼蘭古紙の二〇世紀初における複製は可能なのでしょうか？

——麻紙の伝統的製法による限り当然同じ紙ができます。今日でも、麻紙製造の古い技術を残している村が中国各地に存在し、そこで作られる紙は三、四世紀の楼蘭の古紙と大きな違いはありません。そもそも、紙の製法はそれほど難しいものではなく、いたって単純です。原料・水・すのこの材料（葦・キュウキュウ

草）・白さえあれば、簡単にできるのですから。

紙を科学的に分析する事で、その年代を測定できるのでしょうか？

——顕微鏡写真で判明するのは、材質の相違だけです。楮・樹皮・麻などの区別は当然できますが、材質が同一のもので、それが何世紀のもの、どれだけ古いものなのかということを科学的に実証できる有効的方法はありません。

紙の古さで分かるではないですか。

——「古び」ですね。その古びの科学的測定は難しいのです。まして、人工的に古びが細工されている場合には。人工的に古びが作られ、それが半世紀も経ると、もはや不可能と言ってもよいでしょう。

つまり紙の科学的分析は真贋の有効的識別方法にはならないという事なのですか？

——現段階では、そうだといわざるを得ません。私も何か有効的方法がないかと考えてはいるのですが。

墨の分析での判別はどうでしょうか？

——墨と紙を完全に分離すること、資料としてある程度の量を検出できること、この条件を満足するならば、不可能ではありません。つまり、これはC測定によるものだが、C測定法は紙だけに対してもできます。四センチ四方の紙、四枚を切り取り、それを燃やせば

年代測定はできるのですが、貴重な資料を台無しにしてもよいのですか？

二度目の台湾訪問で感じたこと

籠 谷 直 人

一九九八年一月一日から一九日の五日間に台湾の「中央研究院」Academia Sinicaで開かれた、第九回「太平洋科学協会期間大会」に参加した。主催機関は同院の「台湾史研究所準備処」Institute of Taiwan History Preparatory Office、社会科学、人文科学、自然科学などをすべて含めての国際会議で、その開催は台湾史研究所準備処が独立した研究所になるための実績造りの一環だという。

私の報告は、一月一七日の午後、S-3-1のAsian Business and Taiwan: A Historical Perspectiveのセッションでおこなった。司会者は、同準備処長の女性研究者の劉翠溶先生。大会に参加して思うのは、日本の学会と比較して女性のスタッフ多いこと。私た

ちのセッションや、懇親会などで挨拶する同院の研究スタッフの半分近くが女性であったことは印象的だった。

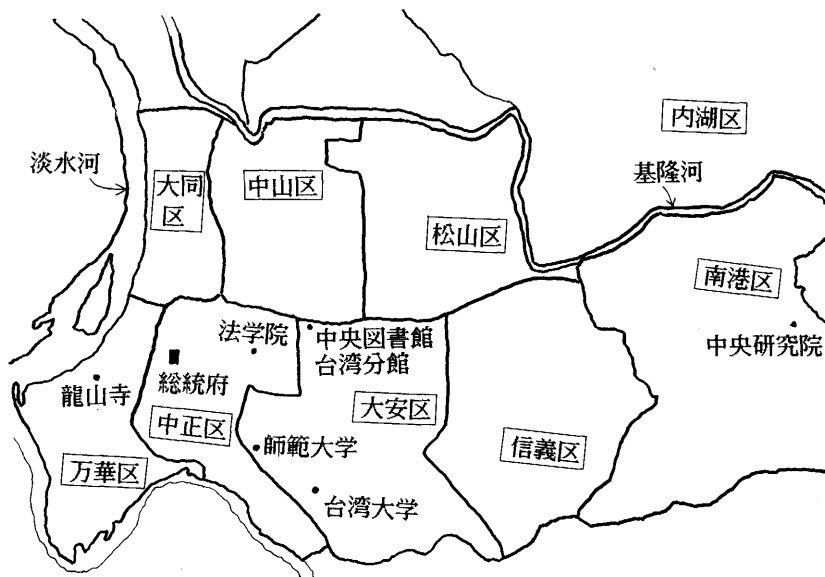
台湾への訪問は、一九九七年一月に訪れてから、今回で二度目。今回の報告は、その最初の台湾訪問で収集した「戦前期南洋華僑関係資料」を基礎にしたもの。資料の多くは台湾総督府の刊行物だったが、日本ではみられない希少な文献資料だった。資料を収集した対象機関の、台湾大学研究図書館、同大学法学院付属図書館（旧台北高等商業学校）、中央図書館台湾分館などがいかに資料の宝庫であるかを痛感した（台湾大学研究図書館に所蔵されている「戦前期南方関係コレクション」については河原林直人氏（大阪市立大学大学院）が仮目録を作成され、利用が可能）。今回の報告参加は、そのときに協力してもらった中央研究院や台湾大学の諸先生への「お礼」も含意してのものだった。

自分の報告日以外は、もう一度、これらの図書館をまわりながら、資料収集と街の見学に時間をつかった。台湾大学と台湾師範大学のある大安區から、その西の中正區に移動して台湾大学法学院（中正區の東）に行き、さらに西の万華區に入り、最後はふたたび東に向かって大安區北部の中央図書館台湾分館に移動する

コースをたどった。万華区ではいつも見学を勧められていた龍山寺をたずねた。林滿紅先生（中央研究院近代史研究所）の解説では、この区は日本統治時代の風景をいまでも残しているところで、日本や中国福建省と取り引きしていた台湾商人の店が多くあったところだったという。地図で確認しても、広い道路が基盤の目のように位置づいている大安区や中正区と違って、細い路がやや込み入ったかたちで位置づいている気がする。

大安区と中正区を歩きながら気になるのは、自動車とバイクの利用の多さとそれらのスピードで、とくにバイクの多さには驚いた。学生も主婦も自転車も多く利用する百万遍の風景はここでは見られない。とくに小さな子供をバイクの前面にのせた女性の利用者を多くみかける時、ここでは買い物用自転車やバイクに代替している印象を受ける。台湾では、モーターゼクションが急速に浸透したことを伺わせる。それだけに路も狭くて、自転車の利用者を見かけた万華区には親近感をもった。

自動車の多さに対応して大安区と中正区の道路幅はかなり大きなものだったが、それに比べて歩道の整備は遅れていた。歩道には場所ごとに段差がある。これは、言い方を変えれば、車椅子での移動は極めて困難



な歩道ということになる。会議で同席した社会地理学専攻の方にきくと、こうした街のインフラの問題は、台湾の輸出志向型工業化が背景になっているという。対アメリカ合衆国輸出の拡大によって膨大な外貨を稼ぎ出す経済は、どうしても内需への関心は副次的になる。モータリゼーションとともに大衆消費社会をつくりだしたとしても、輸入代替型工業化をたどった国と、日本の植民地時代には第一次産品輸出経済であり、戦後は輸出志向型工業化をたどった経済国とは、インフラへの関心に差が出てくるという。その国の経済の型とインフラの様相の問題を考えた。

もう一つ印象に残ったことは、街のなかには持ち返り用の料理品店が多く立ち並んでおり、多くの女性客が買い物に訪れ、いたるところでにぎわいをみせていたことだった。買い求めるものは調理用の食材ではなく、すでにでき上がった料理品、つまりテイクアウト品であった。これは言い方を代えれば、京都高島屋の地階「食料品売り場」が、地上にたくさん現われたような風景である。こうした風景がたちあらわれるのは、女性の有職率の高さを背景にしているという。すこしでも家事労働を省略しようとする社会の合理的な判断の結果であった。それゆえ朝食においても、こうしたテイクアウトの店や屋台のにぎわいがみられた。会議

に参加する女性研究者の多さが印象的だったが、こうした女性の社会進出には家事労働を省略しようという、こうした社会的なインフラが下からでき上がっていないければならないと感じた。道路のような上からつくられるインフラと、テイクアウト品を提供する店のような下からのインフラに、台北市の特徴をみたようであった。

カーラント・コレクションへの旅

藤井 正人

日本に戻る直前の最後の五日を使って、ユトレヒト大学に所蔵されているW・カーラントの遺品を調べるためにオランダに入ったのは昨年の三月の初めであった。アメリカ合衆国、フィンランド、オランダとまわった今回の二カ月間の渡航は、まさにカーラント・コレクションへの旅であった。最後にそこに到るように全体の日程と行程を組んであった。半世紀以上も前に亡くなったヴェーダ学者の遺品が、なぜ旅の最終目的

だったのか。

ヴェーダ学はインド古典学の筆頭としての名声をながく謳歌してきたが、いまではかつての勢いを失い、学問のピークを過ぎてしまったかに見える。しかしインド文明の基層をなすヴェーダには古典研究にとどまらない研究方向があるはずであり、いくつかの新しい方向が確かに現われてきている。その一つに、ヴェーダの生成とインド各地への伝播を動態的に研究する方向があり、二人のヴェーダ学者がドイツ（のちにアメリカ）とフィンランドで同じく七〇年代に、期せずして北インドと南インドとに地域を分けてこの方向の研究を開始している。二人の研究のいくつかの部分は、カーラントの残した資料の再評価と再利用をそもその出発点にしている。

カーラント自身はオーストリアの文学者として終生、書齋を離れることはなかったが、ヴェーダのほとんど全領域にわたる大量のテキストを校訂し出版している。遺品の中の未出版のテキストの写本ノートをも加えると、彼が扱った写本テキストの膨大さがわかる。オランダにいながら、これほどの多種大量の写本をどのようにして手にすることができたのであろうか。カーラントがインドとの間にさまざまなパイプラインをもち、インド各地のバラモンや学者のネットワーク

を利用した写本に関する高度な情報網をもっていたことは知られている。彼の研究が、ヴェーダの学派と各学派に属するテキストに関して新鮮で価値の高い情報に満ちているのはこのためである。彼自身は必ずしも生成と伝播という動態的な視点をもって研究したのではなかったであろうが、死後、彼の仕事は、やり残されたものをも含めてヴェーダ研究の新たな方向への基礎となった。オランダに入る前に、アメリカとフィンランドに滞在したのは、カーラントの仕事を発展的に引き継いだ二人の研究の現在の動向を知るとともに、カーラント・コレクションに関する専門的な情報を収集するためであった。

かくして、ユトレヒト大学の古文書館でブックトラックで運ばれてきたカーラントの遺品の中から見つけ出したものは、カーラントの残した過去とともにカーラントの残した未来であった。帰国後一カ月ほどして依頼しておいた多くの複写物がユトレヒト大学から送られてきた。その中に、カーラントが写本を書き写し、音符などを赤インクで加えたサーマヴェーダ歌曲集のカラー・マイクロフィルムが含まれていた。彼が出版を断念したこの歌曲集を、さきのフィンランドの学者と人文科学研究所でこの二月から共同で研究することになっている。（一九九九年一月記）

中世学会議

小南 一郎

通算すれば、中国での滞在は、二年以上の日月にないのであるが、アメリカへ行くのは、今回が初めてであった。飛行機を乗り継いで到着したのは、ミシガン湖に近いカラマズーという町で、カラマズーの原義は、原住民の言葉で、煙が見えるところ、すなわち宿営地の意味だとのことである。大学のほかにはなにもないようなその地で開かれた中世学会議に出席し、中国中世都市の性格についての論文を一つ発表した。

会議は五百余のセッションから成っていたが、当然ながらヨーロッパの中世に関わるものが大多数を占め、おまけのように、中国の中世に関わるセッションが二つ、日本に関するセッションが一つ付いていた。中国に関係する発表のない日には、西欧中世の文学や民俗に関わるセッションの発表を聴いた。西欧についての基礎知識を欠いており、十分には理解できなかったが、問題意識や方法論には参考になる点が多かった。

この会議には、正式の開会式も閉幕式もなく、運営は各セッションの組織者にまかされ、セッションごと

にそれぞれの分野の専門家が集まって、実質的な討論がなされていた。集まっているのは、いわば身内どうしで、質問も、発表はおまえの持論を敷衍したものであるが、基本的な視点に問題があるといったやり取りがなされていた。そうした中に、風呂敷包みに資料を入れた、一人の見知らぬ東洋人がいて、みんなが笑った時にも笑わず（英語力不足で笑えず）、発表が終わると、黙って会場を出てゆくのであった。いかなる人物だと思われたのか、いささか気になるところである。

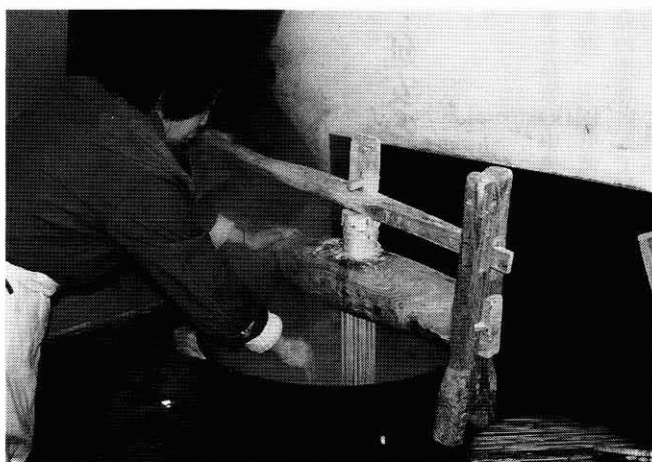
延安の二月

岡村 秀典

黄土高原の中央部にある延安は、一九三七年からの十年間、中国共産党が抗日戦争と内戦を指揮してきた革命の聖地として知られている。その延安郊外にある龍山文化の遺跡から、一千キロ以上離れた長江下流域の玉器が出土していると聞き、さっそく調査に出向くことにした。今から四千年ほど前に江南の玉器が「長

「征」したことが事実なら、伝説の夏王朝が生まれた「革命」の謎が解けるかもしれない、という期待があったからだ。

延安は西安から夜汽車で八時間あまり。ホテルの延安賓館も今はさびれた様子で、宿泊を申し込むとフロント嬢は素っ気なく「没有」。しかし、日本人であることを告げると、即座に部屋が用意された。翌日の早朝、現地の研究者の案内で遺跡を踏査した。黄土高原に切り刻まれた溝谷は、三月というのに氷が凍ったままである。谷奥にある窑洞の任さん宅に駐車し、荒涼たる黄土の斜面をはい登ること一時間あまり、ようやく山頂の遺跡に到着した。黄土高原の山並みが絶景である。空腹をおさえ、拾った土器を抱えて山を下りたところ、任さん宅では昼食の準備ができあがっていた。はじめての外国人ということで、村長さんもやってきて食べたのがソバ粉でつくったホーロー麺。ソバをゆでている竈につながったオンドルに座って食べたこの麺は、突然の訪問客ゆえ肉片すらはいっていない質素なものだったが、身体の芯まで暖まったような気がする。なお、陝北のホーロー麺については、人文研の研究報告『中国技術史の研究』に石毛直道さんが「押しだし麺」と題する論文をタイミングよく発表されたので、詳しくはそれにゆずる。



鍋の上で麺を押しだしているところ

雨うけと変な器

織田 陽

一九九三年の四月のことであった。研究所の図書室に足を踏みいれ、最初に眼に飛び込んできたのは、壁に掲げられている大津西武の展示会ポスターであった。つづいて視線をすこしあげると、春の採光に無機質に鈍くひかる長方形の灰色の金属製の物体が天井に張り付けられていた。いったいこの物体が室内で果たす役目は何かと考えると、自然に視線がそこに釘付けとなつたのをいまでもよく覚えていいる。

その年は風の強い梅雨の年でもあった。そんなある日、この物体が雨うけの樋であると女性職員から教えられた。天窓のすこしのすき間から浸透してくる雨水はこの樋をつたい、壁の片隅に置かれていいるプラスチック製の容器に溜まる仕組みであると。しかし不思議に思つたのは、雨水を何故そのような容器に溜めるのか。床にドリルで穴をあけ外部に流せば、そのような容器は無用ではないか。しかし、この奇妙な物体「樋と器」が設置されるまえには事務机に雨が降り注いでいたのであるならば、これもまた不合理で風流ではな

いかと。

それからの五年は室内の樋と壁隅の器にはたいへんお世話になった。夏の夕立、秋の長雨さらには台風の豪雨。幸いに雨水がこの物体から溢れることもなかった。

こんな人文科学研究所は楽しい場所であった。酒、切腹、髭、金貨、さらには pierced earrings と不思議な雨うけと変な器……。

(一九九八年三月まで図書掛長。

現在医学部閲覧掛長)

〈人文科学研究協会 研究契励賞〉

中江丑吉遺品を守ってくれた中国女性のこと

阪谷 芳直

私は、一九九六年(平成8)九月に、永年預つて来た中江丑吉の書簡や読書ノート類の入ったスーツケースを京大人文科学研究所に納めることが出来たが、昨九八年五月になって、この中江遺品の寄贈に至る経緯

を七月末をメドに纏めて書いて欲しいと求められ、中江吉研究の一助にもなろうかと考えて承諾した。

さて書き出してみると、このスツケースが中江の死後十五年間、どのようにして日本の敗戦・中国の内戦・人民共和国の成立を挟んだ激動の時期を生きたのびて、一九五七年（昭32）に日本に「帰還」し得たかが漠然としか掴めず、もどかしさに襲われた。だが調べて行くうちに、中江の側近者だった加藤惟孝氏が北京引揚に際しスツケースを託した中国女性とは、清朝肅親王善耆の末娘の愛新覺羅・顯琦嬢と判った。彼女なら昔、旅順の小学校で一年以上級だった私の幼馴染みだ、手紙を出せばいい……と考えていた時、偶然にも米日中の彼女が八月三日の中江忌の集りに出たいと言ってきた。「その前に食事でもしながら喋ろう」という、私の申出に応じてやって来た彼女は、積る話を三、四時間も喋ったが、その中で一九五七年に訪中の機会を得た中江会の安田薫氏との接触を次のように語った。

「私が、加藤さんから預ったトランクを家のダブル・ベッドの下奥にしまい、誰にも喋べらずに来たのは、誰かに見つかった公安に没収されでもしたら、日本語の読めない連中がただの紙屑のように燃やしたり捨てたりして仕舞うだろうから、そうなったら大変だと思ったからよ。加藤さんとの約束も果せなくなる

しね。日本人は未だ殆んど中国に姿を見せない頃だったし、私は、日本人なら誰でもいいからあれを持って行って欲しいと願ってた。あの人〔安田薫氏〕——名前は忘れたわ——と、北京の何処で会うことになったか、イキサツは覚えてないけど、話のなかで加藤さんの名前が出た時、『加藤惟孝さんならよく知ってる』というので、その言葉を信じてトランクを渡そうと決心し、二人で我が家に飛んで行き、あの人を入口に待たせ、寝台の奥からホコリだらけのトランクを引っ張り出して渡し、直ぐに持ってって貰ったという次第なの。」

彼女が元王族の故に逮捕され十五年の獄中生活を強いられたのは、翌年（一九五八）二月であつたから、中江書簡も読書ノートも危機一髪で救われたのだ。

編者注…

阪谷氏は社団法人・尚友倶楽部常務理事。なお、中江遺品寄贈をめぐる阪谷氏の文章は『東洋學文獻センター叢刊・第八冊・中江丑吉文庫目録』に所収。

書いたもの一覧 一九九八年一月～十二月（氏名五十音順） ●は単行本

荒牧典俊

「真話」以前の諸真話の編年問題について——「衆霊教戒所言」の諸真話を中心として

吉川忠夫編『六朝道教の研究』所収 二月
哲學研究 第五六六号 十月

岩井茂樹

蕭崇業・謝杰撰『使琉球録』解題 『使琉球録解題及び研究』
京都大学文学部 三月

徐葆光撰『中山伝信録』解題 『使琉球録解題及び研究』
京都大学文学部 三月

琉球冊封使関係資料情報化の課題 『沖繩の歴史情報研究』
沖繩の歴史情報研究事務局 八月

上野成利

P・ド・マン「美学イデオロギー(四)——アイロニーの概念」
(翻訳) 批評空間 II—一六号 一月

批判理論と意味への問い 飯島昇藏編『両大戦間期の政治思想』
新評論 三月

P・ド・マン「美学イデオロギー(五)——アイロニーの概念」
(承前) (翻訳) 批評空間 II—一七号 四月

ホロコーストという出来事を読むために

ちくま 三二七号 六月

P・ド・マン「美学イデオロギー(六)——メタファーの認識論」(翻訳) 批評空間 II—一八号 七月

書評・E・ブロッホ『マルクス論』週刊読書人 七月三日
P・ド・マン「美学イデオロギー(七)——メタファーの認識論」
(承前) (翻訳) 批評空間 II—一九号 十月

はじめに——〈複数文化〉への誘い 複数文化研究会編
『複数文化』のために』(共編) 人文書院 十一月

宇佐美 齊

詩における曖昧と想像力 中西進編『日本の想像力』

唄が流れる——中原中也と小林秀雄の「幸福」訳をめぐって JDC 一月

—— 中原中也とフランス文学をめぐって (中原中也生誕九十年記念シンポジウム) 中原中也研究 三号 三月

岩波哲学・思想事典(「ゾラ」ほか三項目) 岩波書店 三月

Baudelaire——Foyer de la poésie symboliste, *Equinoxe* no. 15, numéro spécial consacré au Symbolisme, Rinsen-Books

ボードレールの新訳に思う 京都新聞 十一月十八日 五月

大浦 康介

テレビのある風景 九一五七

京都新聞 一〇十二月

Les cafés philosophiques: mode ou symptôme, *Les Voix*, No 81, hiver 1998

二〇周年に寄せて *FLOREAL 17 (1997)* 甲南女子大学 一月

フランス文学会

二月

読みものとしての日記

柏木隆雄他訳『ジュール・ルナール全集』十二(月報) 臨川書店 三月

ひとはなぜ自分自身のテキストが読めないのか——テキストの一般性にかんする受容理論的考察

文学報 八一 四月

Le monologue symbolique? — à propos des *Lauriers sont coupés*, *Equinoxe 15*, printemps 1998, Rinsen Books

六月

岡村 秀典

農耕社会と文明の形成『岩波講座世界歴史』第三卷

龍の子孫たち

岩波書店 一月

食事のならわし／自由市場／カギ／刺身

京都新聞 一〇三月

蟠螭紋鏡の文化史

泉屋博古館紀要 一四卷 三月

長江中流域における城郭集落の形成

東洋学報 七九卷四号 三月

卑弥呼の鏡

サンデー毎日 臨時増刊 三月四日

三世紀の政治史を解く手がかり

朝日新聞 四月三日

呉越の青銅器文化 内藤大典編『虹を見た』海援社 四月

●『三星堆 中国五〇〇〇年の謎・驚異の仮面王国』(共著) 朝日新聞社 四月

秦漢帝国の対外交渉とその美術『世界美術大全集 東洋編』第二卷 小学館 八月

金獣／金裝飾品／金竈／銀盤／銀豆／四乳蟠螭文鏡／彩絵車馬人物鏡／鍍金方格規矩四神鏡／獸帶鏡／中平六年方銘四獸鏡『世界美術大全集 東洋編』第二卷 小学館 八月

魏・西晋王朝と邪馬台国『大黃河文明展』日本経済新聞社 九月

商代的動物犠牲『殷墟発掘七〇周年学術記念会論文』中国社会科学院考古研究所 十月

公元前二千年前後中國玉器之擴張『東亜玉器』第一冊 香港中文大學 十一月

中国新石器時代の竪穴住居 浅川滋男編『先史日本の住居とその周辺』同成社 十二月

戦後日本の中国考古学研究 日本考古学 六号 十二月

落合 弘樹

大久保政権と士族 藤野保編『近世国家の成立・展開と近代』雄山閣出版 四月

書評・矢部洋三『安積開墾開墾政策史』日本歴史 六〇五号 十月

姜昌一氏へのコメント——日本の朝鮮認識と自己同一化の過程——山室信一編『日本・中国・朝鮮間の相互認識と誤

解

程

— 46 —

解の表象』

京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊一号 十二月

勝村 哲也

漢字管理機構制定の提言 岩崎宏之編、文部省科学研究費補助金重点領域研究『沖繩の歴史情報研究』総括班研究成果報告書（領域番号：110）平成六年度から平成九年度

文部省科学研究費補助金重点領域研究

「沖繩の歴史情報研究」事務局 八月

ekanj65000 字公開利用の現状『人文社会情報とマルチメデア』全国文献・情報センター人文社会科学術情報セミア

ナーシ리즈 No.8

九月

『電腦中国学』付録 CD-ROM 漢字文献情報処理研究会編

好文出版 十一月

籠谷 直人

日蘭会商（1934-38年）の歴史的意義

人文学報八一号 三月

●日本農書全書 第五二巻（農産加工三）（共著）

農山漁村文化協会 六月

●知多半島歴史研究の十年（共著）日本福祉大学知多半島総合研究所 校倉書房 六月

書評・山岡由佳「長崎華商経営の史的研究——近代中国商人の経営と帳簿——」土地制度史学 一五九号 六月

木島 史雄

『藝文類聚』

●龍谷大学大宮図書館和漢古典籍分類目録（哲学・芸能之部）

（共著）

三月

北垣 徹

道德の共和国——ジュール・バルニと新カント派の政治思想

人文学報 八一号 三月

催眠の空間——世紀末フランスにおける精神医学の言説——

第49回関西社会学会報告書 五月

金 文京

中国近世における知識人の性格——明代山人を手がかりとして

中国史学 七巻 一月

年画の中のヒーローたち

しにか 九一二 二月

●董解元西廂記諸宮調の研究（共著）

中国の語り物文学『中国通俗文芸への視座』

汲古書院 二月

敦煌変文辨体

中国語文学 三〇輯 三月

ソウル訪書行と扶余の旅

人文四四 三月

金庸の歴史観『きわめつき武俠小説指南』

徳間書店 四月

「金学」のすすめ

同右 四月

敦煌文書が語る文学史

しにか 九一七 七月

書評・中里見敬『中国小説の物語論的研究』

中国文学報 五六冊 七月

書評・野崎充彦『朝鮮の物語』

週刊読書人 二三四七 七月

三國志演義と西遊記

ユリイカ 三〇—十二 九月

書評・藤井省三『魯迅の故郷の読書史』

別冊世界・書評の

森

十月

香菱考——試論紅樓夢的另一深層架構

海上論叢二 十月

海外手帳「香港」九—十四

共同通信

桑山正進

Shah-jiki Dheri before Kanishka. *Lahore Museum Bulletin*, IX-1 (January-June, 1996), 31-58.

アウグストゥス靈廟と大ストゥープ：車輪状構造の由來

東方學報・京都 七〇冊 (1997), 566-506.

Not Hephthalite But Kapisian Khingal: Identity of the

Napki Coins, *Ex Moneta: Essays on Numismatics, History and Archaeology in Honour of Dr. David W. MacDowall*, (eds.) Anil Kumar Jha and Sanjay Garg, New

Delhi: Harman Publishing House, 1998, 331-349

小林博行

●新発見事物への名づけをめぐる学内共同のこころみ (共編)

人文科学研究所 六月

小牧幸代

北インド・ムスリム社会の死の儀礼(上)：ふたりのマハル

ムガル皇妃と寡婦

SOGI 四二 表現社 九七年十一月

小南一郎

北インド・ムスリム社会の死の儀礼(下)：シア派3代イ

マームの哀悼行事

SOGI 四三 表現社 一月

許氏の道教信仰——「真誥」に見る死者の運命

吉川忠夫編『六朝道教の研究』

千宝「搜神記」の編纂(下) 東方學報(京都) 七〇冊 三月

語り物文芸の形成——漢から宋へ 神奈川大学編『中国通俗文芸への視座』

遊女と乞食——中国の小説・文芸に見る男女関係の基本形態

中国—社会と文化 十三号 六月

この人・この三冊、エリアーデ 毎日新聞 七月二十六日

李娃伝の構造 再論『日本中国学会創立五〇周年記念論文集』

馬頭娘(蚕神)をめぐる神話と儀礼——オシラサマの原郷を

たずねて 田中雅一編『女神・聖と性の人類学』

平凡社 十月

小山哲

「ポーランド分割」のパラドクス

歴史学通信(島根大学) 二二号 七月

(<http://www.hist.shimane-u.ac.jp/~rekitsu/>にてアクセス可)

CD-ROM版 日本大百科全書 項目「ポーランド史」その

他 小学館 十月

伊東孝之・井内敏夫・中井和夫編『ポーランド・ウクライナ・バルト史』（新版世界各国史 二〇）第四章（ポーランド） 山川出版社 十二月

阪上 孝

『哲学・思想事典』編集協力およびアルチュセール、フランス啓蒙、人類など三〇数項目 岩波書店 三月
フランス、フランス革命、プルードン『マルクス・カテグリー事典』 青木書店 三月
アルチュセールをはじめ読んで読んだころ 現代思想 十二月

佐々木 克

首都東京が誕生するまで 東京人 一九九八・二 二月
薩摩藩と大久保利通を軸に幕末維新を見る『幕末学のみかた』 朝日新聞社 二月

開国の動乱・明治維新・殖産興業・自由民権運動・立憲国家の成立『歴史でみる日本』 NHK 四月

『御一新』の世の中『尾西市史 通史編上巻』 四月
大久保利通没後二〇年によせて 南日本新聞 五月十二日
大久保利通と明治維新 吉川弘文館 八月

曾布川 寛

「花鳥の絵画と書蹟」解説 澄懷堂美術館 三月
明末清初の江南都市絵画（賈曉梅訳）

藝苑 一九九八年二期 四月

向往崑崙山的昇仙——古代中国人描繪的死後世界（劉曉路訳）『簡帛研究叢書』第二輯 八月

●世界美術大全集 東洋編2 秦・漢（共編） 小学館 九月

秦漢美術の性格 同右 九月

秦始皇帝陵兵馬俑と銅馬車 同右 九月

漢代墳墓の彫塑 同右 九月

漢代墳墓絵画に描かれた世界 同右 九月

「中国の古典文学と書画」解説 澄懷堂美術館 九月

高木 博志

●近代天皇制の文化史的研究——天皇就任儀礼・年中行事・文化財—— 校倉書房 一九九七年二月

近代神苑試論——伊勢神宮から橿原神宮へ—— 歴史評論 五七三号 一月

高田 京比子

紹介・アントニオ・ダ・クレマ著（ガブリエーレ・ノリ編）『二四八六年の聖地巡礼記』 史林 八一卷三号 五月

高田 時雄

ピース・ホテル、蜂窩煤、茶道

京都新聞朝刊「龍の子孫たち」一月～三月
中国語學とは何か しにか 九卷五号 四月
漢字の再出發 聖教新聞 六月

敦煌の社會と言語
國際東洋學者會議について
しにか 九卷七号 六月

復刻版國際東洋學者會議議録別冊附録
藏文社邑文書二三種
敦煌吐魯番研究第三卷 八月
九月

武田時昌

灸経から針経へ——黎明期の中国医学とその史的展開
淡編『中国技術史の研究』 田中

中国学最前線「中国科学史」
しにか 九卷六号 六月

『易緯乾鑿度』の易説『日本中国学会創立五十年記念論文
集』 汲古書院 十月

日本中国学会創立五十年記念座談会Ⅱ・これからの中国研究
(対談)『日本中国学会五十年史』 日本中国学会 十月

瀧井一博

●Lorenz von Steins Arbeiten für Japan. Österreichisch-japanische Rechtsbeziehungen II (編著) (Peter Lang 社)

Ius Commune: 虚実のはざまのヨーロッパ法 野田宣雄編
『よみがえる帝国——ドイツ史とポスト国民国家——』(ミネルヴァ書房) 三月

チェコに残る伊藤博文の手紙——ブルノに『クルメツキ文書』を訪ねて——(一) 書斎の窓(有斐閣) 四七五号六月
同右(二・完) 書斎の窓 四七六号 七・八月

『グナリスト文書』再訪 書斎の窓 四八〇号 十二月

田中 淡

●世界遺産を旅する⑥日本・中国・大韓民国・東南アジア(監修) 近畿日本ツーリスト 一月

●中国技術史の研究(編) 京都大学人文科学研究所 二月
比例寸法単位「分」の成立——李誠『营造法式』、喻皓『木经』と人体尺度—— 同右

中国造園史研究的現状と課題(上・下)

中国園林 第一・二期 二月・四月

●週刊朝日百科日本の国宝・五三号・東大寺3・手向山神社(責任編集) 朝日新聞社 三月

東大寺再建と大仏様建築
宋からきた技術者たち 同右

国宝解説・南大門／開山堂／鐘樓／転害門／本坊経庫 同右
清代の建築と離宮苑囿『世界美術大全集・東洋編第9巻・清』 小学館 四月

作品解説・紫禁城太和殿／乾清宮／午門／瀋陽故宮大成殿／天壇祈年殿／圓丘／紫禁城視賞亭／頤和園仏香閣／十七孔

橋／外八廟須弥福寿之廟／普陀宗乘之廟／避暑山莊水心榭／金山寺／普樂寺旭光閣／西黃寺清淨化城塔／孔子廟大成

殿／懸空寺樓閣／東嶽廟飛雲閣／青羊宮八卦亭／礼拝寺大殿(北京牛街) 同右

●ユネスコ世界遺産・第4巻東アジア・ロシア(共著) 講談社 五月

Historical Background of the Formation of the "Cai-Fen"
System of the Yingzao Fashi

第一届中国建築史国際研討会 八月

秦漢時代の建築 『世界美術大全集・東洋編第2巻・秦・漢』

小学館 九月

作品解説・平楊府君閼／高頤閼／緑釉明器陶樓（河北省阜城
県桑莊村） 同右

中国建築史からみた「大仏様」 『大仏様の源流を求めて』

日本建築学会大会歴史・意匠部門協議会 九月

中国の都城と日本の都城…僱師、鄭州から洛陽、開封まで

『大黄河文明展』図録

日本経済新聞社 九月

中国園林在日本 文史知識 第十一期 十一月

中国の庭——日本庭園への影響 『創庭——日本の庭・世界の
庭』 ミサワホーム総合研究所 十二月

五代・北宋・遼の建築 『世界美術大全集・東洋編第5巻・

五代・北宋・遼・西夏』 小学館 十二月

建築設計マニュアルの金字塔 『营造法式』

作品解説・独楽寺観音閣／大雲寺弥陀殿／鎮国寺万仏殿／華
林寺大殿／玄妙観三清殿／竜門寺大雄宝殿／二仙観大殿道

帳／下華嚴寺薄迦教藏殿天宮樓閣／奉国寺大雄殿／雲巖寺

塔／仏宮寺釈迦塔／覺山寺塔／敦煌莫高窟第四三二窟窟檐

／保国寺大雄宝殿／祐国寺鉄塔／靈巖寺辟支塔／晋祠聖母

殿／隆興寺摩尼殿・転輪藏殿／清浄寺（聖友寺）大門 同右

ナンシー・シャツマン・スタインハルト 「陳国公主墓とその

埋蔵品」（共訳、福田美穂と）

中国黄土高原の穴居——仰韶文化を中心に—— 浅川滋男編

『先史日本の住居とその周辺』 同成社 十二月

田中雅一

●島根半島の祭祀と祭祀組織（共編）

島根県古代文化センター 九七年三月

祭祀組織研究への視座

田中雅一他編『島根半島の祭祀と祭
祀組織』 島根古代文化センター 九七年三月

●南インド・タミルナードゥ州の寺院管理法の文化的・政治的
背景と起訴記録の分析——平成八年度科学研究費補助金基
盤研究(c)(2)研究成果報告書

京都大学人文科学研究所 二月

●暴力の文化人類学（編書）

暴力の文化人類学序論 田中雅一編『暴力の文化人類学』
京都大学学術出版会 二月

女神と共同体の祝福に抗して——現代インドのサティ（寡
婦殉死）論争 田中雅一編『暴力の文化人類学』

京都大学学術出版会 二月

ヨーロッパの人類学——フレデリック・バルトの仕事をめぐ
つて 船曳建夫編『二世紀学問のすすめ 九——文化人
類学のすすめ』 筑摩書房 三月

ヒノキは二度死ぬ——宮大工西岡常一の世界 山折哲雄編
『アジアの環境・文明・人間』 法蔵館 三月

スリランカ 大林太良他編『民族遊戯大辞典』

大修館 七月

立命館言語文化研究 十卷二号 十一月

書評・近藤雅樹著『靈感少女論』、近藤雅樹他編著『魔女の伝言板——日本の現代伝説』 民博通信 八一号 七月
書評・押川文子編書『南アジアの社会変動と女性』

インドにおける二つのキリスト教——村と聖地 山折哲雄・長田俊樹編『日文研叢書一七 共同研究 日本人はキリスト教をどのように受容したのか』
国際日本文化研究センター 十一月

●女神——聖と性の人類学（編書）

南アジア研究 十号 十月
女神研究序論 田中雅一編『女神——聖と性の人類学』 平凡社 十月

女神研究の可能性

女から女神へ——南アジアにおける神格化をめぐる 田中雅一編『女神——聖と性の人類学』 平凡社 十月

ユリイカ（特集女神） 三〇卷一五号 十二月

女から女神へ——南アジアにおける神格化をめぐる 田中雅一編『女神——聖と性の人類学』 平凡社 十月
伝統の顔と近代の顔——タミル社会の男と女 杉本良男編『アジア読本 スリランカ』 河出書房新社 十月

富永茂樹
Conserver et exposer : la naissance du musée, in *Annuaire de la Société franco-japonaise de sociologie*, no. 7 一月

にぎやかな葬式——葬式と年忌（共著） 杉本良男編『アジア読本 スリランカ』 河出書房新社 十月
ア読本 スリランカ』 河出書房新社 十月

自由の条件⑤（思想の進行形） 京都新聞 一月九日
欲望の現象学、暴力と聖なるもの、他一項目『社会学文献事典』 弘文堂 一月

神々の器——ヒンドゥー寺院 杉本良男編『アジア読本 スリランカ』 河出書房新社 十月
翻弄される漁民たち——漁の村 杉本良男編『アジア読本 スリランカ』 河出書房新社 十月

●ミュージアムと出会う

アメリカ、群集、トクヴィル、他五項目『哲学思想事典』 岩波書店 三月

けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」第一回研究会記録（共編） 株式会社けいはんな交流部 十一月
●扉の向こうの時間へ——けいはんなマラソンセミナー「人間・生物・時間」が贈る多次元のひととき（共編） 株式会社けいはんな交流部 十一月

精神医学の考古学
精神医学史研究 一号（精神医学史学会） 三月
会話と議論——啓蒙の困難・Ⅱ 第四九回関西社会学会大会・報告要旨 五月

越境するスリランカのタミル人（連続講座「国民国家と多文化社会」第七シリーズ 国民国家のはざまの南インド） 株式会社けいはんな交流部 十一月

Conversation and Debate : Transformation of Sociability in Late Eighteenth-Century France. *Zinbun*, no. 32 十月

富谷 至

二一世紀の秦漢史研究—簡牘資料 岩波講座『世界歴史』3

「中華の形成と東方世界」

●『秦漢刑罰制度の研究』

『世界美術大全集』東洋編2、秦漢「第二章 秦漢の書」「作品解説」

書評・工藤元男『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』

秦漢時代の贖刑 比較法史学会『比較法史研究』七 十二月

狭間直樹

梁啓超日本関係日表（一八九八—一九〇三）『中国近代における日本を媒介とする西洋近代文明の受容に関する基礎的研究』（科学研究費成果報告書）

關於梁啓超的「王学」称頌問題 歴史研究 五期 十月

黄自進報告「辛亥革命と日本—革命派と支援者との相互認識と誤解—」へのコメント 山室信一編『国際シンポジウム 日本・中国・朝鮮の相互認識と誤解の表象 討議集』

京都大学人文科学研究所 十二月

藤井 正人

On the Formation and Transmission of the Jainiṇya-
Upaniṣad-Brāhmaṇa, Inside the Texts, Beyond the
Texts: New Approaches to the Study of the Vedas, ed.
M. Witzel, [Harvard Oriental Series, Opera Minora, 2],

Cambridge, 1997, pp. 89-102.

ヴェーダと法華経の写本研究

前川 和也

●世界の歴史1 人類の起源と古代オリエント（共著）

古代メソポタミアとシリア・パレスティナ 『岩波講座世界歴史2 オリエント世界』

中央公論社 十一月

岩波書店 十二月

Ur III Gisu records of labor forces in the British Museum

(1), *Acta Sumerologica* 20, 1998

真下 裕之

一八世紀半ばのデリー——あるデカン・ムスリムの見聞記から——

あうろーら 十三号 十月

麥谷 邦夫

陶弘景の医薬学と道教 吉川忠夫編『六朝道教の研究』

春秋社 二月

「氣」の宗教としての道教 『The Second Symposium on the Cross-Cultural Cooperation based on Religion and Science』, The Fund for Cross-Cultural Cooperation. 五月

六朝隋唐期道教における「心」略論 中村璋八編『中国人と道教』

汲古書院 十一月

聖教新聞 八月二十日

二月

水野 直樹

●人権年表（共同執筆） 世界人権問題研究センター編集、京都府発行

書評・和田春樹著『北朝鮮——遊撃隊国家の現在——』 一月

図書新聞 一三九三号 六月十三日

京都における韓国・朝鮮人の形成史

民族文化教育研究（京都民族文化教育研究所） 一号 七月

書評・姜徳相『朝鮮人学徒出陣——もう一つのわだつみのこえ』 朝鮮史研究会会報 一三二号 八月

●戦時期 植民地統治資料（編集・解説）全七巻

柏書房 九月

『広辞苑』（第五版）（朝鮮関係項目の執筆・校閲）

岩波書店 十一月

解説・姜在彦著『増補新訂』朝鮮近代史

平凡社ライブラリー 十一月

海軍火薬廠跡・京都南部教会

世界人権問題研究センター編 人文書院 十一月

『京都人権歴史紀行』

鄭信哲報告へのコメント——朝中関係史・相互認識におけるいくつかの問題点—— 山室信一編『国際シンポジウム

日本・中国・朝鮮間の相互認識と誤解の表象』

京都大学人文科学研究所 十二月

森本 淳生

ガリマール版『注意についての論文』校訂上の諸問題 Paul Valéry, *Mémoire sur l'attention*, in *Cahiers 1894-1914*,

tome VI, éd. Nicole Celeyrette-Pieri, Gallimard, 1997.

仏文研究（京都大学フランス語学フランス文学研究会）

印刷文化と手稿^{マニスクラ}——ヴァレリーにおける〈モノとしての書物〉 静脩 三五卷一号 九月

Genèse du sujet — Les premiers *Cahiers de Valéry* et les idées contemporaines —, *ZINBUN*, 32, 1997 十一月

矢木 毅

高麗における軍令権の構造とその変質

東方学報 七〇冊 三月

安田 敏朗

戦前・戦中期日本の言語政策——『満洲国』における多言語政策の内実—— 立命館言語文化研究 九巻二号 一九九七年十二月

書評・駒込武『植民地帝国日本の文化統合』

日本史研究 四二五号 一月

解説・復刻版『國語國字問題の歴史』（平井昌夫著 一九四八年） 日本語論のなかのアジア像 立命館言語文化研究 九巻五・六合併号 三月

「方言」認識の諸相

現代思想 二六巻十号 八月

●新装版 植民地のなかの「国語学」——時枝誠記と京城帝国大学をめぐる—— 三元社 八月

山室 信 一

清末知識分子的東西学観『中日文化交流史大系・思想卷』

浙江人民出版社 一月

書評・『宛字外来語辞典』

朝日新聞・東京版 二月二八日

多にして一の秩序原理と日本の選択 青木保他編『「アジアの価値」とは何か』

TBSブリタニカ 三月

『明治啓蒙思想』「明六社」「文明論之概略」「加藤弘之」廣

松渉他編『岩波哲学・思想辞典』

岩波書店 三月

書評・五十嵐暁郎編『変容するアジアと日本』

朝日新聞 四月十二日

書評・青木キミ子『梅君妹妹』

熊本日日新聞 四月十九日

書評・浜崎廣『雑誌の死に方』

朝日新聞 四月二六日

書評・リービ英雄『国民のうた』

朝日新聞 五月十七日

書評・半藤一利『ノモンハンの夏』

朝日新聞 六月十四日

書評・松崎欣一『三田演説会と慶應義塾系演説会』

朝日新聞 六月二八日

中根千枝他とシンボ『日本はどこまでアジアか』

中央公論 七月号

書評・河田悌一『中国を見つめて』

朝日新聞 七月十二日

大石眞と対談『法政思想史の世界』

長尾龍一他編『日本憲

法史叢書2・憲法史の面白さ』

信山社 七月

書評・ウーグ・クラフト『ボンジュール・ジャポン』

朝日新聞 八月二日

八月を迎えるたびに……

朝日新聞 八月十六日

植民帝国・日本の構成と満洲国 P・ドウス他編『帝国とい

う幻想』

書評・夏曉虹『纏足をほどいた女たち』

朝日新聞 八月三十日

書評・安井宇宙『アマゾン開拓は夢のごとし』

朝日新聞 十月四日

書評・江成常夫、松本徳彦『モノクローム写真の魅力』

朝日新聞 十月二五日

書評・杉原達『越境する民』

朝日新聞 十一月二九日

書評・山内昌之『イスラームと国際政治』

朝日新聞 十二月十三日

今年の3点 朝日新聞 十二月二十日

●『国際シンポジウム討議集「日本・中国・朝鮮間の相互認識と誤解の表象」』（編集）

京都大学人文科学研究所 十二月

山本 有 造

貨幣制度・貨幣政策 西川俊作他編『日本経済の二〇〇年』

日本評論社 一月

財政・財政政策

同右書 一月

書評・平井廣一『日本植民地財政史研究』

季刊経済学論集 六四卷一号 四月

『両』から『円』へ——幕末貨幣学のすすめ『AERA

Mook 幕末学のみかた』 朝日新聞社 四月

コメント・岩橋報告『江戸期貨幣制度のダイナミズム』

金融研究 一七卷三号 七月

選評・谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』

日本経済新聞 十一月三日

横山 俊夫

監修・校訂／Culture of Japan: SAKE/ Popularity of
Jizake Produced Meticulously in the Regions, *Sumitomo*
Quarterly, Winter 1998, No. 71

日日新 木田安彦展によせて『日日新木田安彦展』序文
Thoughts on "New Every Day: KIDA Yasuhiko Exhibition"
右記英訳(フィリップ・ハリス訳、横山校訂)

京都新聞社・木田安彦展実行委員会発行 一月
日選び「現代のことば」 京都新聞夕刊 一月二十日

編集・とうんばらー通信 8号 文部省科学研究費補助金、

基盤研究(A)1 人文科学研究所横山研究室 二月三日

司会／討論参加・竹門会三〇周年記念パネルディスカッション
会誌 45号 財団法人竹中育英会 二月

討論参加・関西在住外国人に関する調査研究報告書／委員会

議論のまとめ 関西インターメディア株式会社 三月十日

企画／編集・京都文化シンポジウム「21世紀・京都文化探訪

——風を創る——」

財団法人平安建都千二百年記念協会 三月
名をつける「現代のことば」 京都新聞夕刊 三月十八日

監修・校訂／Culture of Japan: ORIGAMI/ A Japanese
Tradition Spreads Worldwide, *Sumitomo Quarterly*,
Spring 1998, No. 72 三月

メアリー・フレイザーが蘇る パナソニック・グローブ座公
演「菊と薔薇」プログラム解説

東京アクターズ・レパトリー・カンパニー 四月三日

今様の風流「現代のことば」 京都新聞夕刊 五月十四日

編集・とうんばらー通信 9号 文部省科学研究費補助金、

基盤研究(A)1 人文科学研究所横山研究室 五月十五日

共同編集・中国福建省訪問 琉中文化交流史研究会 学術交

流会記録(同右通信、付録)

対話・やきもの探訪「遙かなる造形 深見陶冶」(深見陶冶
氏と) NHK/BS2 五月二十四日放映

●日用百科型節用集の使われかた——地小口手沢相の電算画像
処理による使用類型析出の試み(小島三弘・杉田繁治両氏
と共著)

京都大学人文科学研究所調査報告 三八号 五月

監修・校訂／Culture of Japan: Uchirwa and Ohgi/ Energy-
Saving Cooling Devices and Symbols, *Sumitomo*
Quarterly, Summer 1998, No. 73 六月

●新発見事物への名づけをめぐる学内共同のころみ(共編・

平成九年度教育改善推進費〈学長裁量経費〉研究報告書／

山本有造氏代表)

京都大学人文科学研究所 六月

節用集の手沢「半半會だより」第四号

京都府立総合資料館 七月一日

共編・プログラム「夏宵三樂——雅樂・能・陶」(樂吉左衛
門氏と) 財団法人樂美術館 七月十五日

討論参加・「第4次京都府総合開発計画点検報告書」

●安定社会の総合研究——ことがゆらぐ・もどる／なかだちをめぐって——（編著・第九回京都国際セミナー（川那部浩哉・藤井譲治・遊磨正秀各氏と共同企画） 京都府 九月

財団法人京都ゼミナールハウス 十月

激動期のなかの日用百科（同右所収）

監修・校訂／Culture of Japan: The Exquisite Beauty of Lacquerware: *Maki-e, Sumitomo Quarterly*, Autumn 1998, No. 74 十月

校訂・木田安彦「木田安彦集 別巻一 風雷房古物散歩」 風雷房 十一月

訳文校訂・サー・ヒュー・コータツツイ、ゴードン・ダニエルズ編・大山瑞代訳『英国と日本——架橋の人びと』 思文閣出版 十一月

日英交流の百四十年（同右所収／原書解説）

編集・とうんばらー通信 10号 文部省科学研究費補助金、

基盤研究(A)1 人文科学研究所横山研究室 十一月十七日

編集・けいはんな／マラソンセミナー「人間・生物・時間」—— 第十一回研究会記録 株式会社けいはんな 十一月

●二十一世紀の花鳥風月——熱き風流を語る——（松井孝典氏と共編著） 中央公論社 十二月

座談会・わざ学——「わざ・生命・文化」（山口修・岡田節人・杉田繁治各氏と） こうとうけん 十六号

財団法人国際高等研究所 十二月

●扉の向こうの時間へ——けいはんな／マラソンセミナー「人間・生物・時間」が贈る多次元のひととき——（田中雅二氏と共編著） 株式会社けいはんな 十二月

吉川 忠 夫

羅含の「更生論」によせて

南都仏教 七四・七五号 九七年十二月

●「六朝道教の研究」（編著）

許適伝 吉川忠夫編『六朝道教の研究』 春秋社 二月

書評・伊藤清司著『死者の棲む楽園——古代中国の死生観』 東方 二〇七号 五月

●中国人の宗教意識

北魏孝文帝借書攷 東方学 九六輯 七月

仏道論争のなかの陸修静

禅文化研究所紀要 二四号 十二月

『中外日報』社説 二四回

一月、十二月

人

文

第四五号

一九九九年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品